

Awamura Akamitsu
あわむら赤光
illustration 夕薙



たそがれ
黄昏の騎士団、

蹂躞、蹂躞、蹂躞す
じょうけん

先行試読版

プロローグ

病室の窓から見上げる月は、いつも綺麗きれいだった。

そう、いつもだ。

十六歳の少年——裏城紫苑うらきしおんは、痛みで眠れない夜をすごすたび、じつとそれを見上げ続ける。体調により、上体が起こせる晩は起こして、それすら難しい日はベッドに伏せたまま。

消灯時間には、テレビを点けることはできない規則だから、仕方なく。

昼間は頻繁に容体を気遣ってくれる看護師たちも、夜の巡回は限度があるので、仕方なく。毎晩、毎晩、もう何年も月を見上げて、痛みと無聊むりょうをやりすごしてきた。

欠けた月も満ちた月も、もう飽きるほど見てきた。

夜の病院は静かだ。

いつも、わびしすぎるほどに静かだった。

だからこそ——ナイフでリンゴの皮を剥むくその音が、よく聞こえた。

紫苑一人のための病室に、ひっそりと響き続ける。

ただやがて、それも止まる。



「できたぞ、紫苑」

と、代わりに少女の呼び声。

若々しい声音と、艶めかしい口調が同居した、不思議な響き。

紫苑は月を見上げるのをやめて、彼女の方を振り返った。

月よりもずっと綺麗な少女だった。

まず目を惹くのは、金色の髪。といって、けばけばしさは全くない。月光を束ねて、さらに磨き上げたような、儂くも美しい色だ。

整った容貌には少女らしからぬ、ひどく落ち着き払った表情を滲める。

ベッドの隣にパイプ椅子を出して、リンゴの皮を剥いてくれていた彼女。

くし形に切って皿に盛り、楊枝を刺して、そっと差し出してくれる。

「ありがとう、エミルナ」

紫苑はお礼とともに、少女の名を呼んだ。

「私の好きでやっていることだ、礼には及ばんよ。くく、なんでも実際にやってみれば、わからないものだな？ 家事など無縁だった私だが——君の世話を焼くのは、存外に楽しい」
などとお姫様みたいなことを言って、薄く微笑むエミルナ。

本当のところ、何者なのかは知らない。どこの国から来たのかも知らない。

彼女は常にセーラー服を着て現れるけれど、本物の学生かもわからない。

年齢すら知らなかった。外見だけなら同年代に見えるけれど、しゃべり方が変だし、接しているはずと大人の女性にも思える——つまりはミステリアスな雰囲気がある。

そして実際、すぐお姉さんぶってくる。

こんな綺麗で優しい姉が本当にいたら、誰もが羨むだろうけれど。

紫苑はエミルナの美貌について目を奪われながら、皿を受けとる。一つを、口に入れて咀嚼。

「ん。美味しい」

「嘘をつけ」

紫苑の感想を、エミルナは薄く微笑みながら、そんなはずがないと否定した。

彼女の言う通りだった。

紫苑は小児癌患者だ。

それも、「保つてあと一年の命」と、医者に宣告された末期患者。

強い抗癌剤の投与、投与で、味覚なんてとつくに喪われている。

どんなに美味しいものを食べたところで、味なんてまるで感じられないのだ。

「美味しいよ」

でも紫苑は、平然と嘘をつき続けた。

「エミルナが剥いてくれたリンゴだから、とっても美味しい」

「歯の浮くような台詞だな」

エミルナはとうとう声を出して、くつくつと笑った。これまた少女らしからぬ、まるで悪の組織の女幹部みたいな、彼女独特の笑い方だ。でも板についているし、紫苑は格好いいと思っている。もっと笑わせたくて、軽口を続ける。

「そうかもね。だけど他に言いようがないし。だって僕はエミルナのが、好きだからね」
軽口だけれども、しっかりと本心も表明しておく。

「じゃないとエミルナはいつも、いつも紫苑を弟扱いするのだ。」

(でも実際、敵わないんだよねえ……)

エミルナは、好きだと言われても堂々としたまま、はにかみすらしない。

ただ口元に手の甲を当て、さらに艶然と笑うだけ。

「そういう台詞も普通は、軽々しく口にしないものだろう？」

「僕は明日、死ぬかもしれないんだよ？ 躊躇してる時間や格好つけてる時間なんてないんだ」
紫苑はおどけた態度で、肩を竦めてみせた。

だが、エミルナの笑顔が見られて、少しはしゃぎすぎてしまったらしい。

いきなり——激しい疼痛に体の芯を貫かれた。

紫苑は思わず背中を丸め、己の体を抱きしめる。

「ご……っ、ごめん……っ」

「よい。構わぬから、静かにしておれ」

エミルナは優しい声でそう言ってくれると、紫苑の背中をさすってくれた。

クールな態度で、だけど甲斐甲斐しく。

この発作は、抗痛剤の強すぎる副作用によるものだ。

眠れないくらいに疼くのは普通。時には今のように、呼吸すらままならないほどに痛む。

多少、さすってくれたくらいでどうにかなる激痛ではない。

だけど紫苑は、エミルナのそのいたわり自体がうれしかった。リングの味と同じだ。たとえ痛みはやりすぎせなくても——救われるような気がするのだ。本当に。心の底から。

五分ほどして激痛は一旦、収まった。

その間ずっと、エミルナは背中をさすり続けてくれた。今日は収まるまでが短かったが、前に三十分も続いた時もずっと、エミルナは休みなくさすり続けてくれたことさえあった。

紫苑を見舞ってくれる人は、ほとんどいない。

看護師たちは、あくまで仕事。

この体では中学もまともに通えなかったし、高校は受験さえしていない。小学校時代の友達も、来てくれたのは最初の一か月だけ。

両親ですら、もう三年近く会っていない。

いわゆる看病疲れ？ 少し違う。病み衰えていく我が子を目の当たりにするのが怖くて、高い治療費を稼ぐ必要があるからと言いつつ、二人とも仕事に没頭しているのだ。

そんな、誰も訪れることのない病室に——エミルナは二年前、突如として現れた。

それからというものの毎晩欠かさず、縁もゆかりもなければ、余命いくばくもない少年の下に、通い詰めてくれていた。

理由は知らない。

聞いたら、「鶴の恩返し」みたいに二度と会えなくなるんじゃないかと恐ろしくて、聞けない。

エミルナのいない夜なんて、もう想像したくない。

紫苑はベッドの背もたれに寄りかかって、乱れた呼吸をゆっくりと整える。そこへ、「楽になりたくはないのかい？」

エミルナが訊ねた。激しい発作に襲われるたびいつも、何度でもしてくる問いかけだった。

「医者にもとつくに終末医療を勧められているけどね……」

闘病の苦しみは、抗癌剤の副作用によるものだけに留まらない。

紫苑は来月にもまた手術をして、腫瘍を切除する予定だった。術中は麻酔をかけるけれど、術後の痛みや体力の消耗は、筆舌に尽くしがたいものがある。しかも、切除したところでもたどこかに転移するのだ。終わらない戦いどころか、負けが決まった戦いなのだ。

だからもう治療は断念して、残り少ない余命を安楽にすごすべきだと、医者は言う。

「嫌だ。僕は戦う」

紫苑は呼吸が整わないまま、弱々しい声音で、しかし断固として言った。

それから語調を和らげて、

「エミルナはキャビアって食べたことある？ ニセモノじゃない、すごい高いやつ」

「あるな」

「すごく美味いらしいね。昼間、テレビで言ってた」

「ああ。あれは確かに美味しい」

「エミルナは恋人作ったり、キスしたことある？」

「まだないな」

「そうか……じゃあ、感想聞けないね。ホツともしたけど」

紫苑は安堵の笑みを浮かべる。

それから、また表情を険しくすると——

「僕は死にたくない。絶対に死にたくないんだ。楽しいことを、まだ何もやってない。美味しいものだって全然、食べたことないし、女の子とキスしたことなければ、おっぱいを触ったこともない。世の中の連中は普通に楽しんでるのに、あるいはいつか楽しめるのに、僕は何も知らずに死んでいかなきゃいけないなんて、不公平じゃないか。嫌だ。そんなの嫌だ嫌

だ嫌だ。だから僕は誰になんと言われようと戦い続ける。諦めない」
 まるで呪詛のように、執着執念に満ちた言葉を吐き続けた。

エミルナはそれを呆れるでも、軽蔑するでもなく、聞いてくれていた。

「紫苑は欲望に正直だな」

と、ただおかしそうに、くつくつと笑うだけ。

「明日をも知れない身だからね、綺麗事とか言っちゃいけないんだよ」

「くく……そうだな。でも、だったら嘘をつくのはいただけない」

「え、なんのこと？」

「蒔エがほやいていたぞ？」

上坂蒔エは、この病院で一番の美人看護師だ。

近年の野暮ったいデザインのスーツ服でも、隠しきれないスタイルのよさも魅力的。

「紫苑がどさくさに紛れて、胸や尻を触ってくるから困ってるとな」

「わかった。嘘をついたことは謝る」

でも、看護師さんたちへのイタズラは謝らない。お利口ぶって、何もしないうちに死んでし

まったら、「あの時おっぱい揉んでおけばよかった!!」と死に際に後悔する自信がある。

「くくくつ、それでこそ紫苑らしいな」

と、エミルナも笑い飛ばしてくれた。

ただし、ヤンチャな弟に対する苦笑なのと、それでも愛情たっぷりに見守る姉のような態度
 なのが悔しい。

紫苑は思わず唇を尖らせる。同時に、エミルナの唇を見つめる。

「あと、僕が誰もキスしたことないのは、嘘じゃないよ」

彼女のそれは肉薄だけど、完璧に形が整っていて、色も口紅なんか要らないほど綺麗。

エミルナは外見の清楚さと、内面の妖艶さ——相反する二つの魅力を兼備している。

「言っておくが、私の口づけは決して安くはないぞ？」

「わかってる。というか、エミルナがほしいほしいキスする人だったら、興奮めだしね！」

どうせこつちを弟扱いしてくるのなら、彼女にも高嶺の花であつて欲しい。

「だが、そうだな……」エミルナは形のいい、顔をつまんで、しばし思案に暮れると、「いつ

か紫苑が退院した。睨には——」

「睨には？」

「その褒美として口づけを——」

「ほ、褒美として口づけを!?」

「蒔エがするよう、私から言っちゃってもよい」

「エミルナのキスじゃないんだね！」

紫苑は大げさに天を仰いだ。

またはしゃいだせいで、痛みがぶり返して、体を丸める。

「すまない。バカを言った」

エミルナは再び優しい手つきで、背中をさすってくれる。

「いいんだ。僕はエミルナとおししゃべりが、本当に楽しいんだ」紫苑は目尻に涙を溜めて痛みを堪えながらも、口元では笑って、「それよりさ——つまりエミルナは、僕が退院して、葎さんとキスさせてくれるまで、ずっといなくならんんだね？」

「ああ、安心するがいい。私は君の傍を離れはしない」

エミルナは紫苑の背中をさすり続けながら、即答してくれた。

二人とも「死ぬまでずっと」とどとか、「最後を看取る」とどとか、そういう類の言葉は一切口にしなかった。

「約束だよ、エミルナ」

「ああ、約束だ。紫苑」

紫苑から求めて、エミルナが応じて、指切りをした。

なのに翌晩——

どれだけ待っても、二十四時を回っても、エミルナは姿を見せなかった。

第一章 さらば、地獄の如き平穩よ

あれは、いつのことであつたらうか？

紫苑は思い返さずにいられない。

消灯された廊下で、エミルナと美人看護師の葎エが、内緒話をしていたのだ。

その直前に、紫苑の痛みが小康状態となつていたことで、二人は紫苑がすっかり眠りこけていると勘違いしていた。病室のままで話が聞こえていることに、気づいていなかった。

「いつまでこの地に留まるおつもりですか、姫様……」

ややひそめた声で、葎エはエミルナに訴えていた。

「あまり長く一所に留まれば、それだけ兄君方に見つかつてしまうリスクも高まります……」
「わかつている……。私とてわかつているのだ、葎エ。……そこを敢えて、後生だ」

「だけど、もう二年も隠れ家を変えてないんですよ？ 姫様らしくない、こんな危ない橋を渡るのなんて初めてです。そこまで紫苑君には、こだわる理由があるというんですか？ そりゃ

わたしも、可哀想な子だと思えますけど……」

「やめてくれ、葎エ。私が紫苑に抱いているのは、同情などではない。ただの利害でもない。

もつと複雑な……軽々しく口にはできぬものなのだ……っ」

と——そんな風に、エミルナたちは口論していたのだ。

二人が声のトーンを落としているのと、扉一枚隔てているのもあって、聞こえてきたのは断片的な会話だった。

二人が隠している背景や事情、関係性などが、全てわかったわけではなかった。それでも最低限、理解できたのだ。

エミルナはもうそう長くは、一緒にいられないのだろうと。

「そう……僕は別れの日が来ることを、覚悟していた」
ベッドで仰向けあおむになったまま、紫苑は独白する。

どうせ誰もいない病室だ、遠慮することなんかない。

「僕は、せめて一日でも遠ざかることを、必死に願っていた」
寝転んだまま、二十四時をとつとくに越した壁時計を確かめる。

普段ならエミルナは、日を跨またぐ前には絶対、顔を出すのに。

別れの日が、ついに来てしまったのだろうか？

あまりに恐ろしくて、その推測を口にできない。

紫苑の心臓を一瞬、冷たい絶望が針となつて刺す。

けれど、

「……いや。違う。……そうじゃない」

薄い枕まくらに載せた頭を、紫苑は左右にした。

「もし、仮に別れなくちゃいけないなくなったとしても、エミルナは僕に黙って行ったりなんてしない。そんな人じゃない」

確信がある。伊達だてに二年間も毎晩、彼女と語らつてはいないのだ。

「じゃあ、なんで来ないんだろう……エミルナ……」

胸がざわつく。嫌な予感がしてならない。

「もしかして、何か事故に遭ったとか……?」

紫苑がそう独白したのと——

遠くで、爆発音があったのは——

まさに同時だった。

「な、何!？」

びっくりなんてものじゃない。ないが、紫苑にはベッドから跳はね起きる力すらなかった。衝撃と緊張で、心臓だけがバクバクと元気に鳴っている。

枕元に手を伸ばすと、おずおずとナースコールのボタンを押した。しかし、返事がない。

（やっぱり異常だ……。何か、大変なことが起きてるんだ）

しかも、エミルナが巻き込まれている公算が大きい。

そう思うともう、紫苑は居ても立ってもいられなかった。

すぐにベッドを抜け出す。

ただし弱り果てた彼の体は、介護なしには、まともに立つこともできない。だから墜落同然にベッドを降りて、痛みに耐えながら、部屋の隅に置かれた車椅子の方へ、這って進む。車椅子にも、半ば這い上がるような格好で乗る。ただそれだけでも、完全に息が上がっている。

また爆発音が遠くから聞こえた。

呼吸を整える時間もどかしく、己の衰弱した体を叱咤しながら、紫苑は病室を抜け出した。

紫苑が入院しているこの「蘆田第一病院」は、五つもの棟を持つ総合病院だ。

いま彼がいるのは、難病患者専用の、一番奥の棟。

他四つの棟が山麓に建っているのに比べ、ここだけまるで隔離されたように、中腹の林の中に建っている。

爆発音はどこからしたのか？

廊下に出た紫苑は、目を閉じて耳を澄ました。

すると今度は、女の悲鳴が聞こえてきた。それも複数、ひっきりなしに。遠いのと、爆発音に比べればか細いので、それまで聞き逃していたのだ。

「急がなくちゃ……」

悲鳴がする方へ、紫苑は車椅子を走らせた。

エミルナの悲鳴も混ざっているかどうかは、遠すぎて判別できない。

でも、確かめないわけにはいかない。

夜間灯の頼りない、仄暗い病院の廊下を、不気味に思っている余裕もなく、紫苑は汗だくになつて車輪を漕ぐ。

悲鳴が聞こえる方へ。病棟の玄関がある方へ。

「無事でいてよ、エミルナ……っ」

不安と焦りに駆られながら、先を急ぐ。

しかし、廊下を遅々として進めない。健康な肉体の持ち主からすれば、何をモタモタしているのかと思うだろう、そんな程度の速度。

にもかかわらず息が苦しくなり、漕ぐ腕が重くなつていく。

「エミ……ルナ……。エ……ミル………ナ……っ」

紫苑の焦りが強まっていく。

今この時も、悲鳴は聞こえ続けている。

もつと。もつと急がなくなっちゃいけないのに。

その想いと苛立ちが、彼の体を知らず前のめりにしていき、募る焦慮が車輪を漕ぐ右手を滑らせ——結果、大きくバランスを崩した。車椅子から投げ出されるように、うつ伏せに倒れた。

床にぶつけた衝撃で、あちこちが激しく痛む。

あんな亀の歩みのようなものでも、体を酷使したせいとか、発作までぶり返してくる。鈍くまとわりつくような、不快な疼痛に苛まれる。

紫苑は床を舐めさせられたまま、立ち上がれなかった。

立ち上がるうにも、体がもう言うことを聞いてくれなかった。力尽きていた。

（僕の体は……どうしてこんななんだよ……つ）

悔し涙がじわりとにじむ。

楽しいことをしたくても、一つもできない。

長生きしたくても、それもできない。

エミルナを捜しにいかなくちゃいけないのに、たったそれだけのことさえ、満足にできない。

（動け……動けっ……動けっ……！）

紫苑は己の体を、叱咤し続ける。

別に子ども時代みたいにもう一度、外で皆と野球やサッカーをさせてくれとか、そんな大そ

れたことは言わない。

ただちよつと、何が起きているか様子を見に行つて、エミルナの無事を確かめただけ。

（だから動いてよっ……。お願いだから……。さあつ）

歯を食いしばり、気力だけで腕を動かす。

床に爪を立てるようにして、這い進もうとする。

一ミリでも先へ。一センチでも先へ。

痛みと苦しみでもう顔中、脂汗まみれになりながら。

そんな紫苑の努力を、不屈の精神を、何よりエミルナへの想いを——

嘲笑うように、異形の怪物が現れた。

全身が水でできた、大型犬のようなバケモノだ。

カチカチと忙しなく顎門を噛み合わせ、人の苛立ちを誘うように打ち鳴らす。

そいつが廊下の先に立ち塞がり、ひたとこちらを見据えていた。

そう、目玉なんてどこにもないのに、確かにそいつの視線が感じられたのだ。

廊下を這いずる紫苑の方へと、静かな殺気とともにやってくる水の異形。

「……なんだ……こいつ……？」

紫苑は目を睜みはらせていた。視線を釘付けくぎにされていた。逃げるべきだったろう。しかし、逃げられなかった。体は相変わらず言うことを聞かなかったし、何より驚きすぎて頭が麻痺まひしていた。

爆発音を聞いた時点で、どんな事故や事件が起きていても、動じないつもりだった。でも、怪物が目の前に現れるなんて、あまりに予測外の出来事だった。

そして、その怪物がついに、牙きばを剝むいて襲いかかってくる。

あの大きな顎あごで噛みつかれたら、紫苑の貧弱な肉体など、ひとたまりもないだろう。

(僕はこんなところで死ぬのか……っ？ こんな死に方で……っ？)

冗談ではなかった。絶対に嫌だ。

床をつかむ紫苑の手が、ますます爪を食い込ませる。

しかし、それが今の彼にできる、なけなしの抵抗。

窓から月明かりが差し込んでいた。

それが暗い廊下に、光と影のコントラストを作り上げていた。

紫苑は、影がいつぱいに広がる床に這いつくばったまま、迫る氷の怪物をにらみ返していた。恐怖に目を閉じるのではなく、せめて心だけは負けじと。

そんな紫苑の勇気と、負けん気を――

ことば
寿ことばぐように、いきなり抱き締められた。

これもまた、全くの不意打ちだった。

床を覆い尽くす影の中から突如、女の細腕が、まるで水面へ浮かび上がるように現れたかと思うと、紫苑の背中へしっかりと回して、抱擁したのだ。

(なにこれ!? なにこれ!?)

再びパニックになる紫苑。

しかし、女の腕は問答無用で、紫苑をより強く抱き寄せていく。

それで紫苑の全身が、影の中へと引きずり込まれていく。

頭の天辺てんぺんまで、どつぷりと。



影の中は、不思議な空間になっていた。

地面すら存在しないし、足元の感覚も全くないのに、落下していつているわけでもない。

光源すら存在しない闇の中なのに、自分と相手の姿だけは、はっきりと見える。

そう、紫苑を影の中へと抱き寄せた、その人物の顔がすぐ目の前にあった。

誰あろう、エミルナの美しい顔が。

「び、びつくりさせないでよ、もう……っ」

「すまない、紫苑。しかし、君をあの《氷の従士》から助けるためには、他に方法がなかった」

エミルナは言葉とは裏腹に、意地悪でいたずらっぽい笑みを浮かべて答えた。

「いや、そうだね。助けてくれてありがとう、エミルナ」

「礼には及ばないさ。むしろ、君は私を恨んでもいい。なぜなら《氷の従士》が狙っているのは、私だからだ。君は巻き込まれて死ぬところだったんだ」

「はは、エミルナが無事ならもう、なんでもいいよ」

紫苑は心底からそう言った。心底から安堵していた。大好きな彼女と抱き合うこの大胆な格好に、羞恥や疑問を抱く精神的ゆとりすらなく、逆に抱き寄せる力を強くしてしまうほどに。

「ところが……決して無事とは言えないのだがな」

「え？」

エミルナが自嘲の笑みを浮かべ、紫苑はぎよつとさせられた。

遅まきながら気づかされる。抱き合い、触れ合った彼女のお腹の辺りから、紫苑のパジャマへ、何か温かい液体が染み渡ってくる感触に。

「エミルナ、血がっ！」

「慌てるな。傷はそう深くない。ただ、寒い……」

エミルナはそう言って、温もりを求めるように、紫苑へより一層しがみついてくる。

紫苑も温めてあげたい一心で、足までからめるようにして密着度を高める。

「こんな傷、ここから出られれば、すぐに治せるのだがな。《氷の従士》どもがうるついているうちは無理だ。隠れてやりすすしかない」

「あの犬、他にもいるんだね……」

紫苑は思わず首を竦めた。一体でも充分すぎるほど恐ろしかったのに。あんな怪物が無数に病院の中をうろついている様を想像して、ますます怖くなる。

「この中にいけば大丈夫なの？　ここがなんなのか、いまいちよくわかってないけど」

「私が影の中に創り出した、即席の領土だ。この中にいれば、《氷の従士》たちでは絶対に手出しできない。そこは安心して欲しい」

エミルナはそう言いつつ、経緯を説明してくれる。

「今夜も君の部屋を訪ねようとしていたのだがな。寸前に私は《氷の従士》の奇襲を受けてしまい、このザマだ。可能ならば病院を巻き込まないよう、逃げ出したかった。だが、奴らの足は速く、追ってくる気配は一つきりではなかった。逃亡は諦め、咄嗟に廊下の影の中へこの空間を作り出して、引き籠もるしかなかった。そこへ折良くというか悪くというか、君が現れた。だから急いで保護したといういきさつだ」

「なるほど……」

紫苑は生返事を返す。

日常あり得ない話が次から次へと出て、頭の中で整理するのでいっぱいだった。そんな紫苑の顔つきを見て、エミルナがまた自嘲の笑みを浮かべて言う。

「実は、私は人間ではないのだ」

「ごめん、それは気づいてた」

「……そうなのか？」

心底意外そうに、きよとなるエミルナ。

紫苑は苦笑を禁じ得ない。

「だって、二年前に会った時から、エミルナって全く見た目が変わってないじゃない」

普通は成長著しい年代だ。背が伸びたり、顔つきが大人びたりと、あつて然るべきだった。

「そう言われれば、そうだな……。自分では気づきにくいものだ」

「この際だから聞いちゃうけど、エミルナって何歳？」

「女の歳を聞くものではないぞ——と言いたいところだが、正直に答えよう。二百歳ほどだ」

「そりゃ大人びてるわけだね……」

しかも僕なんか弟扱いされるわけだよね……と内心、唇を尖らせる紫苑。

「私の感覚としては、まるで小娘だと思っっているのだがな。だから、おばあちゃんだとか思われたら、私の方が寂しいぞ？」

「そんだけ長生きしてて、本当に恋人とか作ったことないんだよね？」

「誓ってない」

「じゃあ、別に気にしないよ」

弟扱いは気にしてるけど！

紫苑は強がって、敢えておどけた口調で言う。

するとエミルナが、抱き合った格好のまま、耳元で囁くように語り出す。

「恋仲になってもよいと思える男には、ついで会ったことがなかったよ。第一、私はこの百年ほどずっと逃げ回っていた。甘やかな時間を作る暇など、これまでなかった」

「僕と一緒にすごした、この二年間も？」

紫苑にとつては、甘やかな時以外の何物でもなかったが、エミルナにとつてはどうなのか？

「くく、君は本当に臆面もなく、ストレートに訊いてくるな？」

「君こそすぐ、そうやってお姉さんぶる」

大人なら躊躇を覚えるものだと、笑われたみたいで、紫苑は反発する。

「違うからねっ。僕が直球でそういうこと訊いちゃうのは、子どもだからじゃなくて、残された時間が少ないと脅されてたせいだからねっ」

「くくくく、わかった、わかった」

愉快そうに笑ってみせるエミルナ。

しかし結局、紫苑の問いには答えず仕舞いだった。上手くはぐらかして、話を続けた。

「私はな、逃亡者なのだ」

「どこから、誰から逃げてきたの？ さっき言ってた、《氷の従士》って奴ら？」

「信じてくれるか、紫苑？ 地上から見える雲の上にはな、もう一つの世界がある——」

「そう言つてエミルナは、淡々とした抑揚で説明を始める。

地上の文明のように科学は進んでいないが、代わりに魔法のような技術が存在する、牧歌的だが閉鎖的でもある、悠久の「雲上界」。

かつて地上の人々の中には、奇縁を経てそこを訪れ、地上に戻った後で、雲の上の不思議な世界の様子を、伝説伝承や物語に仕立てて流布させた者たちもいる。最近では指輪を追い求める冒険譚を描いた、イギリス人が有名だ。

雲上界は、この地上に比べて遥かに国土が狭い。

ゆえに、たった一つの王朝によって統治されている。

天帝と呼ばれる、たった一人の専制君主が君臨している。

絶対的な力を以って、だ。

そう、歴代の彼らは神にも斉しき奇跡の力——すなわち《権能》の持ち主であった。

親から子へ、次代から次代へと、その《権能》を継承していた。

そして今上には、八人の子がいる。

次の天帝は、その王子・王女らの中の誰かがなる。

他の兄妹たちを皆殺しにし、残った一人が帝冠を戴き、《権能》を継承するのが、太古から連綿と続いている雲上界の習いなのだ。

「紫苑。私は雲上界の王女だ。その八人の中の末妹だ」

エミルナは一切の感情を押し殺した声音で、ただそれが事実なのだからとばかりに告げた。

「そして、兄上たちに敵わぬを知り、この地上へ逃げてきた。いや、今も隠れ家を転々と変えながら、逃げ回っているのだ」

「敵わないの？ お兄さんたちは、そんなに強いのか？」

「ああ、強い。その上、私は全く戦いに向いていない。臆病な性格も。授かった《王権》も」
エミルナの声音に、今まで以上の自嘲の色が、はつきりにじんだ。

でも紫苑などからすれば、前線に立ってバリバリ戦うエミルナなんて、想像もつかない。

まさか本物のお姫様だったとは思わなかったが——儂くて、守ってあげたくなる、それでこそエミルナだろうと思う。理想の女性だと思ふ。

「僕からも質問していい？ 《王権》ってのは何？ それを使って戦うんだろうけど」

「父たる天帝は私たち兄妹八人に、神にも斉しき力の一部を分け与えた。全部で八種あるそれ

らを、私たちは《神授されし王権》、あるいは単に《王権》と呼んでいる」
 「なるほど。エミルナがもらったのは何？」

「《月の王権》だ」

「似合うね！ イメージぴったりだ」

「くく、ありがとう。しかし、たとえ不似合でも、私は火や風の《王権》が欲しかったよ」
 エミルナは微笑にまで、強い自嘲の色をにじませた。

そして、彼女曰く――

八種ある《王権》とはすなわち、地水火風獣森陽月。

「《火の王》たる次兄は湖とて燃やし尽くせるだろうし、《風の王》たる三兄は町一つくらい根こそぎ吹き飛ばすことができる」

「……それはまた……凄まじいね」

なるほど、「神にも斉しき力の一部」という触れ込みに誇張はない。

「比べて、私が父上から授かった《月の王権》は、最も戦いに不向きだ」

「まあ、月の力を使つて戦うって言われても、ピンと来ないね」

たとえ似合わなくても、もつと戦える力が欲しかったという、エミルナの切実な願いを聞いてしまつと、同情を禁じ得ない紫苑。

「お父さんもひどいことするよね。娘のこと、可愛いだらうにね」

「それがな、君の言う通り、まさに似合う、似合わないの話なのだよ。父上といえど、私たちになんでも神授できるわけではなくて、その性質に適した《王権》しか授けられないというわけだ。ゆえに私に殊^{とと}さら意地悪をしたのではなく、私に相応^{かまわ}しいのが《月の王権》だった」

「火のお兄さんはいつもカッカしてて、風のお兄さんは飄々^{ひまごよう}としてるとか？」

「ああ、その通りだ」

エミルナがおかしそうに、思い出し笑いをする。

「とにかくその物騒なお兄さんたちが、日本に来てエミルナを捜し回つてたわけだ？ 今晚ついに見つかったわけだ？」

「いや、兄上たちのほとんどは、雲上界に居座つたままなのだ。だから、地上に降りた私を追い回しているのは、兄上たちに仕える騎士たちなのだよ。いま襲撃してきているのも、そつだ。四兄――《水の王》ジークムントの差し向けた、《水の騎士》たちだ」

「騎士？ そんなまでいるの？」

「仮にも王族だからな」エミルナは大いになすいた後、「父たる天帝は、神にも斉しき力である《権能》の一部を、私たち八人に《王権》として授けた。同様に私たちはその《王権》の一部を、他者に《特権》として分け与えることができる」

「その《特権》を授かったのが、騎士か……。エミルナにもいるの？」

「ごくごく少数ながら、な。例えば、蒔エがそつだ」

「ああ、そういう関係だったんだね」

蒔エがかつて内緒話の中で、エミルナのことを「姫様」と呼んでいたことも、臍ふくに落ちる。「ここで待っていれば、蒔エたちが助けに来てくれる」だから安心していいと、エミルナは太鼓判を押した。

「……でも、僕はさ、たくさんの女の人の悲鳴を聞いたんだよ。……あれはもしかして、エミルナの騎士たちなんじゃ……?」

「確かに《氷の従士》スックワイプを使役している奴は、怖ろしく強い。四兄あにぎの切り札の一騎だ。しかし蒔エたちは、必ずしも《水の騎士》を打ち倒す必要はないのだ。私たちの下へ駆けつけ、すぐ外をうろついている《氷の従士》スックワイプどもを追い払ってくれれば、皆で遁走できる。蒔エも強い騎士だからな、従士どもなら相手にならない」

「そっか」

紫苑も大いにならずいた。そういう話なら、黙って待つてよう。

(というか、何も事情を知らない僕が、あれこれ懸念するのもおかしい話だったかも)

紫苑はそう思うことにした。

早く救助に来てくれるよう、祈ることにした。

じつとエミルナを温めながら。

流血とともに、刻一刻と体温を失いゆく、彼女の体を抱き締めながら。

ところが——エミルナの口数がだんだんと減っていった。

意識も朦朧もうろうとし始めているのに、紫苑は気づいた。

腹部からの流血のせいだというのは、明白だった。

「ねえ、エミルナ? 本当に傷は浅いの?」

「私の言うことが信じられないのか、紫苑は?」

「じゃあ、確認してもいいよね?」

紫苑はいきなり、エミルナのセーラー服の裾すそを、べろんとまくり上げる。普段ならば、心底慕っている彼女に向かって、そんな大それた真似はできない。エミルナの素肌なんて、眩まぶしすぎて直視できない。でも、緊急時における紫苑はどこまでも大胆で、躊躇ちゅうちゆがなかった。

エミルナの傷を確かめて、紫苑は叫ぶ。

「嘘うそつき!」

医者でもない彼は、その裂傷がどれだけ深刻なレベルかは判断できなかったが、少なくとも浅傷にはとうてい見えなかった。

にもかかわらずエミルナはずっと、気丈に、平静に振る舞っていたのだ!

「ここを出よう。そしたらすぐに治るんでしょ?」

「……ああ。《時の特権》を使えば、すぐに。ただ私たち王族は、同時に二種の《特権》を行使できないのだ。今、私は《影の特権》を使ってここへ隠れているため——」

「その治療効果のある《特権》は使えない、と。じゃあ、やっぱり外に出よう？ このままじゃ失血死しちゃうよ」

「ダメだ。《水の従士》^{スラフワイア}どもがずっとウロついている」

紫苑にはわからないが、エミルナにはこの空間の外の様子が、確かめられるようだった。

ならばこのまま蒔エを待つ方が確実か、リスクをかけてでも一旦^{いつたん}外へと出る方がよいか——押し問答する気は、紫苑にはない。

ゆえに紫苑が告げた譲歩条件は、一つ。

「じゃあ、僕をエミルナの騎士にして」

紫苑が何らかの《特権》を授かり、最低限度でいいから戦えるようになれば、ここから脱出するリスクも激減するはずだった。

紫苑が《氷の従士》^{スクワイア}を相手している間に、エミルナが傷を治し、また影の中に籠城する。

失血死の不安さえなくなれば、紫苑はいくらでも蒔エを待ってもいい。愛する彼女と二人きり、文句もない。むしろ幸せ。

「名案でしょ？」

「……………ダメ……………」

果たして、エミルナは却下した。

弱々しく首を左右にしながら。

「どうして？ 僕じゃ——弟みたいなこんな僕じゃ、頼りない？」

「……………違う。……………そうじゃないんだ、紫苑」

エミルナはかぶりを振り続けた。

「むしろ……………君なら……………私……………になれる……………だろう」

肝心のところが聞こえなかった。

聞かせたくないのか、エミルナが言葉を濁した。

でも、紫苑が唇を尖らせて、「今さらそんなのないよ」「ちゃんと教えてよ」と目で訴えると、彼女は苦笑を浮かべ、愛おしそうに紫苑の頬^{ほお}を撫^なでながら、

「紫苑なら、きっと私の右腕になれる」

今度ははっきり言ってくれた。

耳を疑いたくなるような、うれしくて堪らない言葉を。でも、紫苑は慎重になった。

「どうということなの？」

まだ喜ぶなど自分を戒めて、彼女の話に耳を傾けた。
 「戦いに不向きな私の《特権》の中で、唯一、戦闘向き力がある」
 エミルナは痛みを堪え、とつとつと語ってくれた。
 「その名を——」



上坂蒔エは、すこぶるつきの美女である。

濡れたような艶を持つ黒髪に瞳。

野暮つたいナース服でも隠せない、熟れた肢体の曲線。

歳は二十二——から一切老化しないように、停止させてある。

そう、時間を操る能力こそが、彼女がエミルナから与えられた《騎士特権》だった。

二年前から「蘆田第一病院」に勤めている、看護師というのは仮の姿。

今、蒔エは本来の役目を、《月の騎士》としての働きを求められていた。

「ああもうっ、わたしが休んでる時に限ってっ」

ひつつめていた髪を振りほどき、暴れるのに邪魔なナースズボンを脱ぎ捨て、色気が滴るような脚線美を惜しげもなくさらしつ、仮眠室を飛び出し、病院の廊下を全力で駆けていく。

そのスピードは実に、時速六十キロを超えていた。

常人に出せる速度ではない。騎士はその性格や感情のあり様、精神力の強弱——雲上界ではひっくり返して「心力」と呼ぶ——に比例して、基礎身体能力も跳ね上がり、ただ単に「力が強い」「足が速い」「生命力が靱い」という面でも化物じみていくのだ。

その上、騎士が扱う《特権》は、遠かりしといえどまさに、神にも通じる奇跡の異能。

蒔エの走るスピードがさらに、異様に、加速されていく。

自分の周囲だけ時間の流れを操り、早めることで、相対的に身体速度も速めたのだ。

そうして山麓の第一病棟から、中腹にある第五病棟の玄関前まで、自動車用の舗装された坂道をおつという間に駆け抜けた。

「蒔エ様！」

「お助けください！」

二人の看護師が、蒔エの到着を見るなり快哉を叫ぶ。

彼女らもエミルナに仕える騎士だ。この病院には現在、蒔エを含めて十四人の《月の騎士》が、看護師として勤めていたり、交代で周辺を哨戒している。毎夜、紫苑を訪ねるエミルナの安全を確保するため、身分を偽ったり、純粹な警護役として待っているのだ。

今、二人は多数の《氷の従士》を相手に、交戦していた。

この玄関は一步も通さじとばかり、奮戦していた。

「時エもすぐさま突撃すると、全身が氷でできた魔犬どもを手刀で粉碎し、下着が見えるのも構わない大胆なハイキックで撃砕する。戦いながら、二人に訊ねる。」

「状況はどうなってますか?」

「敵騎士たちは、裏山の方から襲撃してきています! 全員で迎撃に当たっています!」

「私たちはエミルナ様をお捜しする途中なのですが、こいつらにからまれてっ」

「敵騎士の数は?」

「三騎ですっ。しかもどいつも大騎士クラス以上で、一騎はあのサファリムです!」

「ジークムントの奴、エゲつない戦力を送り込んでますっ」

「氷の牙、サファリム? なるほどこのワンちゃんたちは、彼の眷属けんぞくというわけですね」

時エは歯噛みし、逡巡した。

他の十三人は、残念ながら大した騎士ではない。

エミルナからわずかな《特権》しか授かっていない。

否、エミルナがどれだけ分け与えようとしても、心力が足りずフネウマに拝領できなかったのだ。

資質が、器がなかったのだ。

しかし時エは違う。

時間を操る能力は《月の王権》に内包される一側面、あるいは一属性というもので、本来はエミルナが有している異能である。

その神にも奇しき奇跡の力のうち、四割もの力を、時エは《特権》として授かった大騎士だ。類稀たぐいまれな心力の持ち主だったのだ。

現在、エミルナに仕えている最強騎士として、時エはこの襲撃者を討ち取る責務があった。仲間たちを庇なほって戦う義務があった。

しかし、それもエミルナの無事が確保できてからの話だ。

今は遮しや二無にむ二、時エの主君を捜しだすべきではないのか?

たとえ仲間たちから犠牲者が出ようと、《月の女王》の救出を最優先とすべきではないのか? 仲間たちだっつてそう望んで、身を盾たてにして襲撃者を阻はらんでくれるのではないか?

(ごめんなさい……みんな……つ)

時エは苦渋の決断をした。

否——決断しかけた寸前、声が聞こえた。

「よお、こんばんは、美人のお姉さん。あんたが噂うわさの「時間厳守」?」
裏山の方から、闇を切り裂くようにして、襲撃者たちが姿を現した。

時すでに遅しだった。

仲間たちは皆《水の騎士》三人の強襲を食い止めきれず、やられてしまったようだ。

「戦闘ナースさんたちもみんな可愛かったけど、噂通りあんたが一番の美人さんだな」

最後まで抵抗した仲間を踏み越えて、三騎士の一人が不遜に笑う。

声からして、恐らくまだ若い青年だろう。

恐らくというのは、こいつの顔が見えないからだ。全身を鈍色の、流体金属のような何かで覆っているからだ。

「そのふざけたあだ名は好きじゃありませんけど、確かにわたしが《月の女王》エミルナ様の、最後にして最強の盾、上坂蒔エです」蒔エは内心で冷や汗を垂らしながら、余裕の態度を取り繕って返事をした。「それに、わたしたち程度で美人、美人と騒いでいたら、エミルナ様の尊顔を拝謁した時に、腰を抜かしますよ？」

「そりゃ楽しみだ！ さっさとあんたもぶちのめして、押し通らせてもらわないとな」

「ええ、会わせてあげます。みじめな捕虜として、這いつくばった格好で！」

「ハハハ、言うじゃん！」

流体金属男は蒔エに挑発されても、痛痒も感じた様子もなく快活に笑う。

もう勝った気であるから、鷹揚でいられる。

実際、彼がそこはかとなく放つ心力の圧は、蒔エに比肩し得るレベルだった。

しかも敵は、この流体金属男だけではないのだ。

「おしゃべりはいいから、早く片付けようよ」

明るい色の髪をポニーテールにした、高校生くらいの少女——長い鞭を腕に巻きつけた《水の騎士》が、つつけんどんな口調で言った。

心力の強さを隠そうともせず、蒔エをストレートに威圧せんとにらんでくる。

そう、心力の強さはそのまま、授かることのできる《騎士特権》の上限に直結する。

王族たちが持つ《王権》は、一言に「水」だ「月」だと言っても、実際には多様な側面を内包し、多彩な属性の超常能力として駆使できる。

《月の女王》エミルナならば例えば、闇や時間を操り、幻影や満月光で人々を惑わせ、亡者を己が眷属として蘇らせることもできる。

一方、騎士が授かることのできる《特権》は、それら多様な異能のうち、一側面一属性に限定される。

しかもその一属性のうち、何割かのみを授かるというのが、普通は心力の限界だ。

例えば、エミルナの時間を操る力が「百」だとしたら、蒔エが授かることができたのは「四十」が限度だったように。

もしも、「百」全てを授かることのできる心力の持ち主がいたら、その彼は人の身でありながら、神の力を一端なりと恣にする怪物ということだ！

雲上界ではそんな怪物のことを「騎士公」と呼び讃えるが、まあ滅多にいるものではない。というか、「百」のうち「十」——すなわち一割を授かることができるだけでも、稀有な才能の持ち主だとされ、二割を超えていけば「大騎士」と尊称される。

この流体金属男とポニーテールの少女は、間違いなく大騎士級だ。

仲間の見立てに間違いはなかったし、同じく大騎士の蒔エは皮膚感覚で確信する。

さらには——

蒔エたちと交戦中だった《氷の従士》どもが、いきなり撤退していく。玄關前のロータリーを走りながら、氷でできた体がドライアイスのように気化していく。白い霧と化していく。

そうして最後は、一匹の大きな犬に吸収されていく。

掛け値なしに、熊のような体軀を持つ犬だった。大きいなんてものじゃない。

《氷の騎士》二人の後ろから、のそりとその巨体を現した。

しかも、人の言葉を淡々としゃべった。

「水原渚の言が正しい。《月の女王》に逃げられる前に速攻で仕留めるぞ、敦賀淳司」

この地上には存在しない、雲上界の生物だ。

ジークムントより《氷の特権》を授かりし、股肱の臣だ。

《氷の牙》の異名を持つ、《水の王》の陣営でも有数の実力者。

その心力の圧は、蒔エといえども測り知れない。

わかっているのは、流体金属男とポニーテールの少女を、凌駕しているということ。

「お初にお目にかかります、サファリム卿。お噂はかねがね、お会いできて光栄です」

蒔エはかかる重圧をこまかすため、軽口を叩いた。

サファリムは完全に無視。宣言通り、もうおしゃべりはやめということだ。

可愛げのないこと！

「行け」

サファリムに静かな声で命令され、左右の《水の騎士》たちが一齐に放たれるように、蒔エへと攻めかかってきた。

蒔エの左右にも《月の騎士》がいるが、雑魚と見切って眼中になし。

「舐めてくれるわねっ」

「蒔エ様、一騎お任せします！」

看護師姿の仲間たちが、二人がかりで流体金属男に躍りかかる。

強いとはとうい言えないながらも心力を振り絞り、一人が《闇の特権》で目晦ましをしてから、もう一人が《三日月刀の特権》で斬り伏せる算段だ。

狙いは悪くない。だがしかし、

「舐める？ どっちが？」

流体金属男の敦賀淳司が、不遜に笑った。

その動きの速さは、二人の《月の騎士》の比ではなく、あっさりと後の先をとる。心力の桁が根本から違い、基礎身体能力の差はまさに雲泥。

加えて、なんらかの《騎士特権》によるものだろう、淳司の両手の指先まで覆い尽くす謎の金属が、突如として形を変えた。

手の先へ先へと、さらに伸びていくと、まるで二本の剣のようなフォルムと化す。

淳司はそれを二刀流もかくやに振るって、一閃。二閃。

《月の騎士》の一人が利き腕を斬り飛ばされ、一人が腹を掻つ捌かれ、地面に倒れ伏す。痛みに悶え、のた打ち回る。わずか一瞬の出来事であった。

「大丈夫ですか!？」

「あんだ、よそ見してる余裕あるワケ?」

仲間の容体を思わず気遣った蒔エは、野太い風切り音が迫るのを聞いた。

ポニーテールの少女・水原渚の振るった鞭が、蛇のように襲いかかってくる。きていた。

そう、尋常の武術によるものか、あるいは《騎士特権》の仕業か、この鞭はまるで生き物のように蠢き、複雑な軌道を描いて肉薄する。

「あるからしてるんですよ!」

蒔エは虚勢を張って、大嘘を言い返す。

ただし、この鞭攻撃自体の対処が容易なのは、本当だった。

にらみつけ、意識を凝らし、《時の特権》を発動する。

たちまち動画の逆再生映像の如く、鞭が元来た軌道をまんまトレースして戻っていく。どれだけ複雑な軌道を描いて追ろうが、関係ない。《時の特権》を行使すれば、見切る必要やかわす必要すらないのだ。

「な、ナニよこれえ!？」

「わたしに飛び道具の類は効きませんよ!」

狼狽する渚に向かって吠えようと、蒔エは次の対処に移る。

淳司が余勢を駆って、斬り込んできたのだ。

突進速度も利用した鋭い刺突。

ただし、ケンカ慣れはしているようだが、まともな武術をかじったわけではなさそうだ。

蒔エから見れば甘い。温い。第一、スピードなら負けはしない。《騎士特権》で自分だけを時間加速させ、淳司を圧倒する速度を以って、刺突をかかわすことは可能だった。

それを敢えて、蒔エは回避ではなく逆撃を選ぶ。

こちららも真つ向から淳司へ突進する。流体金属の切っ先を、甘んじて右胸に受ける。刃で肉や内臓を貫かれる痛みに耐えつつ、全力の掌底を淳司の腹部に放った。

肉を切らせて骨を砕く、カウンター戦法だ!

「ぐあはっ」

淳司は衝撃で、病棟の外壁まで吹き飛ばされ、叩きつけられる。ただの掌底とはいえ、大騎士にして心力ココロカマでより勝る蒔エが打った渾身こんしんだ。鈍器どんきなどよりも遙かに重く、それこそ砲弾もかくやの強烈な一撃だ。

加えて綺麗きれいなにカウンターが決まっているから、威力は倍増。

いくら流体金属で守っているからといって、その衝撃は防ぎきれるものではなかった。

淳司は前のめりにうずくまると、打たれた腹を押さえながら、ゲエゲエと嘔吐おうとを始める。

流体金属に覆われていた頭部を解放し、隠れていた顔をさらす。

やはり二十歳か、その手前くらいの青年だった。

精悍せいけんな大人の男の顔つきじゃない。どこか青臭さが抜けきれない。

「なんだ、可愛い顔してたんですね？」

と、蒔エは揶揄やゆする。

まだ悶絶もんぜつしている淳司と違い、彼女の右胸の傷は完治していた。

そう、あれほど深々と刺し貫かれていたのが、嘘のように消えていたのだ。

《騎士特権》によって、傷の部分だけ時間を巻き戻し、刺し貫かれる前の状態にしたのである。

蒔エもこの《特権》があるからこそ、肉を切り捨てるような危険な戦法を、取って採った。

「テメエエエツ、テメエエエエエエエエツ」

淳司が蒔エの揶揄やゆに、安い挑発てんぱつに、あつさりと逆上する。

先ほどと打って変わり、蒔エの強さを思い知って、精神的余裕がなくなったからだろう。

(チヨロいもんです)

と、壁際かきでうずくまっている淳司を、見下す蒔エ。

彼も渚なみも、かなりの心力ココロカマの持ち主だと見受けるが、騎士となってから日が浅いのだろう。実際、二人とも若いし。ゆえに戦闘経験が圧倒的に足りない。己の時を止め、百年近く、エミルナを守り通してきた蒔エとは、年季が違いすぎる。たとえ大騎士相手に二対一でも、蒔エは全く負ける気がしなかった。

ただし——油断ゆだんなんかはしてられない。

敵は、真打は、別べつにいるからだ。

「勉強べんきょうになっただろう？ 後でよくよく反省しておきたまえ」

戦闘中にもかかわらずサファリムが冷静に、まるで他人ひと事ことみたいに淳司たちへ薫陶くんたうを垂れながら、超然せつぜんと前まへに出でくる。

白銀色の体毛が、月光を拒むように跳ね返して、凄々せいせいと輝く。

四本の肢あしが音も立てずに、ゆっくりと迫る。

なんと冷たく、静かな重圧じゆうあつだろうか！

蒔エは勝手に後退あしひきりしようとする己の両脚を叱咤しだし、なんとか踏み留とどまった。

「次は貴公がお相手してくるんですか、氷の牙？」
 「連れがあまりに不甲斐ないのでね。致し方なくだよ、時間厳守」
 「そう、どうかお手柔らかに！」
 叫ぶなり蒔エは突撃した。

相手は格上、先手必勝あるのみだ。《騎士特権》で限界まで時間加速し、己の体をあたかも一本の投槍と化さしめ、真っ直ぐにサファリムへと突っ込む。

「申し訳ないが、手心を加えるなどと、我が主への忠誠を疑われるような真似はできない」
 サファリムはしごく冷淡にそう答えた。

同時に、獐猛に顎門を開いた。

そこから噴き出される、猛吹雪のプレス！

あまりの風圧に、たちまち蒔エは突進速度を削がれ、阻まれ、逆に押し返されないようにと、踏ん張らなくてはならないほどであった。

しかも、体温を急激に奪われ、凍傷に蝕まれ、体表は霜づいて身動きとれなくなっていく。

耳を聳するほどの吹雪音の中で、蒔エは絶叫した。

「これがサファリム卿が、ジークムント王から授けられた《氷の特権》……！」

単純無比の脅威にして苛烈無情の暴威だった。

蒔エは《時の特権》を以って全身の時間を逆流させ、凍てつく肉体を元通りに復元する。

さもなければ、凍死を待つのみだろう。

同時に吹雪の流れも、時間ごと逆流させようと試みる——が、サファリムの心力があまりに強大すぎて、蒔エの《特権》では干渉できなかつた。

同様に己の肉体を巻き戻し復元させる速度よりも、サファリムの吹雪に蝕まれる速度の方がわずかに勝り、刻一刻と肉体は熱なき死へと近づいていく。

(ここでっ、わたしがっ、倒れたらっ——エミルナ様はどうなります!?)

蒔エは己が魂に火を点け、燃やした。

心力を限界以上に振り絞った。

脳髓が過負荷で焼ききれるような痛みを訴えるが、歯を食いしばって無視した。
 だが、彼女の忠義と献身は報われなかつた。

「あなたはよくがんばったよ。でも、ごめんね」

不機嫌な謝罪の声、蒔エの耳朶を打つ。

耳を聳するほどに、風と雪が吹き荒んでいるにもかかわらず！

(どうして!?)

気づいた時にはもう、渚が吹雪の中をどこ吹く風でやってきた。

まるで吹雪の方から少女だけを、避けて吹いているようだった。
 「あなたも時間の流れを操れるみたいだけど、『流れ』そのものをどうこうするのは、あなたの方が専門だ」

それすなわち、《水の王権》の一側面。一属性。

《潮流の特権》。

渚が面白くもなさそうに、鞭を振るった。

たちまち蒔エの首に巻き付いた。

己が肉体を復元するため、《時の特権》で逆流させていた時間の流れそのものを、《潮流の特権》によって操られ、遥かに緩やかなものに変えられしよう。

凍気が蒔エを蝕む速度の方が、復元速度を圧倒してしまう。

「ぐっ……ううっ……うううっ……！」

あつという間に、膝をつかされる蒔エ。

それ以上は抗うこともできず、ついに地に伏し、土を舐めさせられる。

騎士の多さ、層の厚さという点で、《水の陣営》は八王の中でも最大級だと言われているが、まさにその怖ろしさを思い知らされていた。サファリム一人が、強力な騎士ではなかった。

蒔エ以外に大騎士のいない、《月の陣営》とはおよそ次元が違う。

歯噛みとともに、死を覚悟する。

ところが、

「貴公を殺すつもりはないよ、蒔エ卿」

吹雪を吐くのをやめたサファリムが、冷酷に告げた。

「貴公を討ち取っても、エミルナ様に逃げられては元も子もないのでね。生かしたまま、交渉材料として使わせていただく。さてさて、貴公に人質としての価値があればよいのだが……エミルナ様は、貴公のことをどう思っているだろうね？」

（世迷……言を……！）

蒔エは怒鳴り返してやりたがったが、もう口が動いてくれなかった。

全身はびっしりと霜に覆われ、体の感覚は麻痺しきっている。

（逃げてください、エミルナ様……。わたしなど置いて……。逃げて……。早くっ……）

そう伝えたくとも、もはや蒔エにはもう思いの丈を、誰かに届けることさえできない。

あのお優しい《月の女王》は、恐らく蒔エを見捨てては行けないだろう。

そう、皮肉なことに、エミルナ的美徳が今は、蒔エにとっての絶望以外の何物でもないのだ。

「うっ……ううっ……っ」

蒔エは涙し、嗚咽した。

負けたことが悔しかった。
自分の弱さが不甲斐なかった。

何よりも、これからエミルナを襲う悲劇を想えば、胸が痛んで堪らなかった。

「へへっ。手こずらせてくれやがってよ」

立ち上がった淳司が、まだ腹を押さえながらも、蒔エを見下ろして勝者の笑みを浮かべる。

「すぐに降参してくれたら、痛い目に遭わずにすんだのにな」

渚が見てられないとばかりに、そっぽを向いてぶっさらぼうに言う。

「さて、蒔エ卿を運んでくれたまえ。失礼のないよう、丁寧にね」

サファリムが淡々と、二人の騎士に命じる。

（誰か助けて……っ。わたしのことはいいから、エミルナ様を助けて……!!）

蒔エは叫び出したかった。

でも、できない。口も声も凍り付いてしまっているから、だけではない。

上坂蒔エこそがエミルナの最強騎士なのだから。

助けを求める側ではなく、助けに駆けつけなければならぬ立場なのだから。

その自分が無理なら、誰もこの窮状は打破できない。

そう思っていた。

蒔エは、そう思っていた。

その時、空気がざわついた。

渚、淳司、そしてサファリムの視線が、蒔エを離れ、あらぬ方へと向けられる。

病棟の中から玄関先へとやってくる、一人の少年に釘付けになる。

「ひたひた、ひたひた、足音とともにやってくる彼。」

蒔エも眼球運動だけで、そちらへ視線をやった。

（まさか……。まさか……。っ、紫苑……。君……。?）

最初、誰だかわからなかった。

蒔エの中では紫苑といえ、いつもベッドで横たわる、弱々しい印象しかなかったからだ。それが元気に、場違いなほど陽気に、こちらへ向かってくるではないか。

「や、あ、こんばんは、お三方。皆さんが《水の騎士》?」

紫苑はまるで状況を把握してないような、明るい声で挨拶を告げた。

「バカが。死ぬ」

淳司が吐き捨てる、鬱陶しげにその場で手を振った。

流体金属の一部が水滴となつて投擲され、中空で形を変えて刃となつた。そのまま、トス——と紫苑の心臓の位置に突き立つ。

死亡だ。普通ならば。

「痛っ。ちよ、やだなあ、いきなり」

なのに紫苑は顔を擧めるだけで、ごく無造作に、自分の心臓を刺し貫いた刃を、抜き捨てる。流血はしたが、ただそれだけ。

しごくあっさりとは、傷口が塞がっていく。

普通、ありえない現象だ。

「全力で仕留めたまえ。あれは騎士だ」

「チッ」

サファリムが冷静に命令し、渚が仕方なさそうに鞭を叩きつける。

「重い一撃だった。紫苑の頭を上からグシャグシャに、もはや原型を留めぬほどに、叩き潰す。でも、同じことだった。」

潰れた紫苑の頭部が、それがまるで、ごくごく当たり前の自然現象のように、ぬけぬけと元通りに再生されていく。

「……時エ卿と同じ、《時の特権》……か？　だが、どこか違和感が……」

サファリムの淡々とした口調の中に、当惑がにじんだ。

この冷静沈着な騎士をして、狼狽せしめていた。

(そう、あれはわたしの《騎士特権》とは違います……)

時エも内心、同意する。もし自分ならば、脳を破壊された時点で即死だ。そして、死ぬば《特権》は使えない。復元しようにもできない。

紫苑が使っているのは、決して《時の特権》ではない。

もっとおぞましい別の何か！

その異様さが皮膚感覚として伝わったのだろう。

渚が、淳司が、サファリムが、息を呑んで紫苑を凝視していた。

軽率には動けなくなっていた。

そんな、針で刺すような警戒の視線をいっぱい浴びて、紫苑は——

すつかり元通りに再生した口を使って、平然として言った。

「いきなり攻撃してくるなんて、ひどくない？　あ、でも、リアルな戦いつてそういうものかな？　マンガやアニメとはそりゃ違うか。でもさ、敢えてちよつとおしゃべりとかしようよ。名乗りを上げたりとかしようよ。だって——その方が、楽しいくない？」

薄ら笑みさえ湛えて、そう言つてのけたのだ。

第二章 楽園の如き騒乱よ、こんばんは

時間はしばし遡る。

エミルナが影の中に創った、籠城用の不思議な空間の中で、紫苑は答えを聞かされた。

「その名を——《不死の特権》という」

「不死！」

紫苑は思わず感嘆した。

なんと甘美な響きだろうか！

末期癌患者の自分にとっては、まさに喉から手が出るほど欲しい。

「そう、その顔だよ、紫苑。ああ、やっぱり」

エミルナは半ばからかうように、半ば満足そうに、微笑んだ。

「この《特権》は、生半な心力の持ち主には、授けることはできない。どんなに辛くとも、苦しくとも、絶対に死にたくない、生きたい、そう願っている、闘い続ける——そういう人間じゃないと、適格者足り得ないんだ」

わかるかい？ とエミルナは、再び紫苑の頬を撫でた。

「私は百年ずっと、適格者を探していた。百年ずっと、見つけられなかった。そうして諦めかけたところに、ついに見つけた適格者——それが紫苑、君だよ」

エミルナはそこで一度、言葉を切った。
紫苑はゴクリと、喉を鳴らした。

「懺悔するよ。私は最初、君を騎士にするために近づいた。《不死の特権》を授けるに相応しい適格者かどうか、見極めるために毎晩、病室を訪れた。百パーセント、私の都合だった」

「でもエミルナは、今までそんな話、一度も切り出さなかったじゃないか。二年間、いつでもチャンスはあったよね？ 僕、実は聞いてたんだよ……本当はずっと同じ町にいたら、危険なんだよね？ 実際に今日、《水の騎士》に見つかっちゃったもんね」

「くくく、蒔エたちにも散々、せつつかれたよ。紫苑を騎士にするなら早くしろ、しないなら早く見切りをつけるとね。でも、私は踏ん切りをつけられなかった。この《特権》は私の切り札だからと、見極めは慎重にしなければいけないからと、蒔エたちと自分に言い訳して、ずるずると決断を引き延ばした。この《特権》を授ければ、君はもう闘病で苦しむこともないのだとわかっていながら、いざ現実には君を私の騎士にするのは、恐ろしかった」

「どうして恐ろしかったの？」

「君を私の天位争奪戦に巻き込んでしまう。君を私の傍に縛り付けてしまう。こんな身も蓋もない手段で、君を私のものにしてしまう。それも不死となった君を、未来永劫にだ！」

痛みを堪えて、切々と訴え続けるエミルナ。

その顔は、例えようもなく美しかった。尊かった。

「ああ。なるほどね」

そして紫苑は、ひどく腑に落ちていた。

「ひどくエミルナらしい、心配をしたんだね。ひどく優しくして、ひどく僕想いで、ひどく僕のことを侮^{あなづ}かって、つまりはひどくお姉さんぶってる。やんなっちゃうなあ」

紫苑はひどく腹を立てていた。

（別にカンシヤク起こしたっていいよね？　だって弟の特権じゃん。先に弟扱いした、エミルナが悪いんだからね？）

また唇を尖らせ、自己弁護をしながら、苛立ち口調で「姉」にねだる。

「今すぐ僕を、君の騎士にして」

でも眼光だけは、覚悟を決めた「男」の目で。

しばし、エミルナと見つめ合う。

決して視線は逸らさない。逸らしたら負け。紫苑にはわかっていた。

だから、先にエミルナの方が、ふっと目を伏せた。

「やれやれ、ヤンチャな弟を持つと苦労するな」

根負けして、ぼやいた。

「紫苑。上着を脱がせてくれないか？」

「いいよ」

目を伏せたまま頼んだエミルナに、紫苑は即答した。セーラー服のスカートに手をかけた。本当に好きな相手を脱がせるなんて、普段だったら絶対できない。

でも今は、「覚悟」を見せる時だから、四の五の言わない。

「下着も脱がしてくれ」

「わかった」

紫苑はエミルナの背中に回ると、慣れないブラジャーのホックと格闘をして、なんとか外す。「ちなみに、見ても怒らないよね？」

「ああ。私も腹を括^{くく}った。今だけ許す。そして——君の叙勳式を始めよう」

エミルナがそう宣言するなり、彼女が服を脱いだ意味がわかった。

バサリ、と羽の鳴る音。

華奢な背中から、一對の翼が生まれていた。

しかもよく見れば、エミルナの全身から、月光のように淡い煌めきが発している。

なるほど、これが彼女の「本性」というわけか！

人ならざる雲上界の王族の、本当の姿か！

紫苑は思わず、見惚れていた。あまりの美しさに、神々しさに、まるで歴史に残る芸術品を
目の当たりにしたかのような感動を抱き、女体を前にした劣情など吹き飛んでしまったからだ。

「キスをしたことがない——そう言っていたな、紫苑？」
翼を広げたエミルナが、紫苑へと向き直る。

堂々と。素肌も胸元も隠そうともせず。

傷や痛みなんてもう、どこにもないかのような気丈さで。

「つまりはこれが、お互いにとつてのファーストキスだ」

紫苑の顎を右手でつかむと、もう離さない。

「このこと、この意味、どうか忘れないでくれよ？」

「うん、わかった」

「本当にか？ 弟にファーストキスを捧げる姉などいないぞ？」

「うん、知ってる」

紫苑もまた、彼女の細い肩を両手でつかむ。

覚悟を見せる。

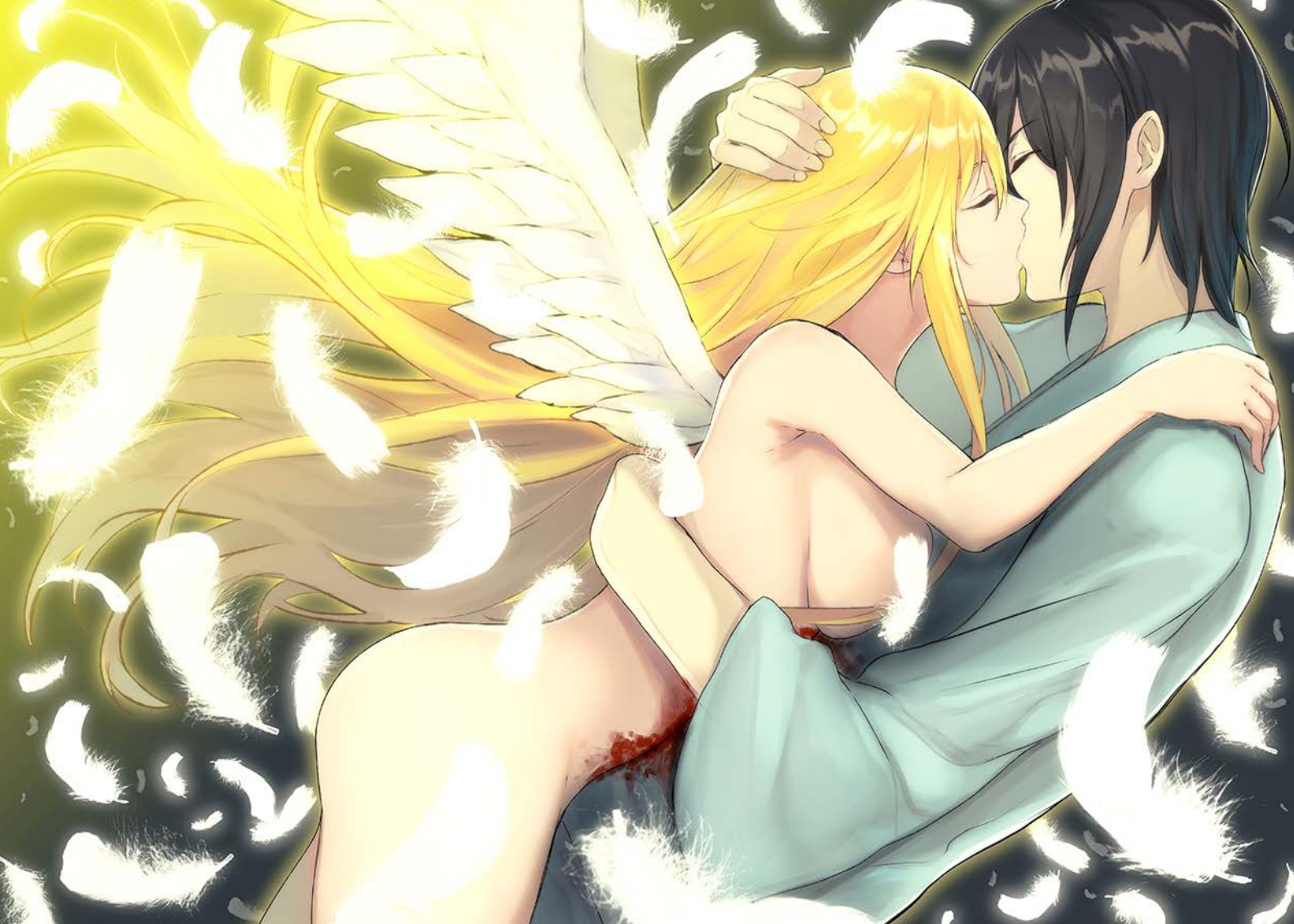
「本来、叙勲に必要なのは、騎士から王への接吻儀式だ。部位はどこでもよい。私なら普段は、

手の甲に口づけを許す。だけど紫苑——君だけは特別だ」

「光栄だね」

そして——

二人はどちらからともなく、唇を重ね合った。





《水の従士》どもはしつこかった。

エミルナが潜伏した廊下の辺りを、まだウロウロとたむろっていた。数は、八。そいつらが一齐に、一点を振り返る。

廊下の床を覆う影の中から、紫苑がスーツと姿を現したからだ。

一番近くにいた一匹が、冷たい殺意とともに、容赦なく躍りかかってくる。水でできた顎門を、これでもかと開いて、紫苑の首筋へ噛みつかんとする。

その動きが、今の紫苑の目には、克明に映っていた。

まるで武術の達人もかくやの見切りで、紫苑は無造作に右腕を、《水の従士》の喉奥に突っ込む。そうやって噛む力を削いでから、《水の従士》の体軀ごと右腕を大きく振り上げ、勢よく振り下ろし、氷の犬を床に叩きつけて、粉碎する。

あつという間の出来事、あつという間の早業だった。

残る七匹たちに、動揺らしきものが走る。

「なるほど、この力は凄いね」

軽々と一匹をしとめて、紫苑はあつけらかんと呟いた。

独白というわけではない。

「くく、私の言う通りだったろう？」

紫苑の足元から伸びる、周囲より濃い影の中から、エミルナの声が聞こえる。

僕は今から《特権》を授かった騎士だ――

望んで志願したとはいえ、急に実感や体感を得られるかどうか、最初は不安だった。しかし、まるで杞憂だった。

体中に力が漲っている高揚感。圧倒的な全能感！

癌に蝕まれて弱りきった全身に、いつもこびりついていた倦怠、あるいは抗癌剤の副作用による疼痛など、もう何年も煩わされていた辛苦が、きれいさっぱり取り除かれていた。

おかげで己の脳漿までが、かつてないほど冴え渡っているのが、体感できた。

それでいて炎のような烈しい何かが、新たに脳髓へ宿っているのが実感できた。

これがきつと、エミルナが言うところの心力だろう。

紫苑の、魂の炎だ。

ただし熱はなく、冷たく燃える、不死の炎だ。

紫苑はそれを内省し、脳髓から己の肉体の隅々まで、行き渡らせる様を思い描く。あたかも心臓が血を送り出し、全身へ血流を行き渡らせるように。ただそれだけで、全身が躍動する！

《水の従士》の群れへと向かって、廊下を走る。
思いつき走る。

高校陸上の記録を一瞬で破り、百メートル走のギネス記録を一秒で破り、車よりも速く疾風よりも速く、あつという間に肉薄する。

もう何年も、寝たきり生活だった自分が！ 介護を受けなければ車椅子に乗るのも困難な、末期癌患者のはずの自分が！ 独りで、己の二本の足で、走っていたのだ!!

「そーれ！」

紫苑は歓喜の掛け声とともに、群れの一匹を殴りつける。

ただの素手の一撃で、水の塊でできた魔犬をあつさり粉砕。

残る六匹がたちまち憤慨し、一斉に襲いかかってくる。

紫苑はそれをまとめて回避！ 「走る」の次は「跳ぶ」だ。

紫苑は軽い一蹴りで、なんと天井スレスレまで跳躍していた。

さらには宙返りを決めて、三角跳びの要領で天井、壁と蹴って、《水の従士》の一体を、頭上からアクロバティックに急襲する。

そいつにも跳び蹴りを喰らわせて、撃沈させる。

「動ける……動けるぞ……!! ははは、夢みたいだつ。もう一度、走って跳べるなんて！」

思わず感涙が零れてしまった。

「はははは！ あはははははははは！」

場違いなほど陽気な笑顔で、ひたすら戦う紫苑。

もはや廊下は狭すぎる。ガラスを割って庭へと跳び出すと、追ってきた五匹を相手に入り乱れ、走っては跳んで、避けては殴り返して、歓喜のままに粉砕する。

そして気づけばもう、《水の従士》は八匹全て、バラバラに砕け散っていた。

くくくく、もう遊び相手がいなくなってしまった。そんな顔だな、紫苑？
自分の影の中から、エミルナのほくそ笑みが聞こえてくる。

今の君にとつては眷属風情、遊び相手にしかならないだろう。騎士の強さは《特権》のみにあらず。その心力に応じた、身体能力と運動能力の激増にもあるのだ。単純無比の暴力だ。

話しながら、セーラー服姿のエミルナが、紫苑の影の中からスーッと現れる。

《月の女王》は薄い胸をふんぞり返らせると、高らかに告げた。

「そして君には、私の持つ《不死の特権》の全てを授けることができました。

そう——君はただの騎士ではない。

その頂点に立つ、不死の騎士公だ！

誇れ、紫苑！

君はそれだけの心力の持ち主だったということだ！」

まるで我がことのように誇り、高揚するエミルナ。

くつくつと、悪の女幹部のような笑いがもう止まらない。クールな彼女らしくない。

でもそれだけ、不死の騎士^{ジ・イモータル}の誕生を喜んでくれているのだ！

「紫苑。君はもう、病や死に思い煩わずにすむだろう。どころか君の肉体は不滅となり、君はまさしく永遠の存在となった。老いることも、死ぬことも、傷つくことも一切ない」

紫苑は自分の右手を見る。

硬い氷を素手で割り砕いて、あちこちに擦り傷ができていたはずだった。骨が皮を突き破り、露出していたはずだった。全身とてガラスをぶち破った時に、切り刻まれたはずだった。

しかしそれらも、嘘のように再生されている。

痛みも消え、皮膚はまるで赤ちゃんのように真新しくなっていた。

そして、病棟の窓に映る自分の姿。

骨と皮だけだった四肢には肉がつき、蒼白だった顔面は血色がよくなり、抗癌剤の副作用で剥げ落ちていた頭皮には毛髪が生えそろっていた。

「なるほど、これが不死の生か……」

「そうだ。君が私の騎士となり、私を守り、私のために天位争奪戦を戦い抜く、その対価だ」

エミルナがスカートのポケットから取り出した、リングを投げ渡してくる。

今夜の、見舞いの品だったのだろう。紫苑はキャッチすると、そのまま咀嚼する。皮がついたまま、直接齧りつく。健康な者でも歯が弱ければできないだろう。わざと、バリバリと音を立てるようにして喰らう。

舌に広がる甘みと酸味が得も言われなかった。もう何年も、何を食べても味がしなかったの。感動のあまり、夢中になって貪る。芯まで残さず食べてしまう。

病室からではなく、庭から見上げる月は、今までで一番美しかった。

そして、夜風が肌に心地よいこと！

一年中エアコンのかかった病室で、全く代わり映えない毎日ですごしていたせいで、紫苑は磨なんてまるで頓着しなくなっていたが、今が七月であることを思い出す。

「対価、か……」

「そうだ。もうわかっただろう、紫苑？」

紫苑の視線を一身に独占するように、エミルナがその先へ立つ。

月を背負い、まるで謳い上げるかのように、紫苑の新生を——否、蘇生を改めて寿ぐ。

「君は強大なる力と、不老不滅の肉体を得た。」

君は今までの人生で、楽しいことなど、ほとんど知ることができなかっただろう。

だが、これからはもう違う。
一つ一つ、あらゆる愉悅を知り、堪能することだつてできる。
君はもう無力ではなく、時間は無限にあるのだ。
不死者の生を、存分に楽しむがいい！」



そして、現在に至る。

紫苑は襲撃者たちを撃退するため、出陣した。

エミルナは特等席から観戦するため、再び紫苑の影の中へ潜った。

二人は、まさに蒔エを捕えんとしていた、襲撃者たちを発見した。

「敢えてちよつとおしゃべりとかしようよ。名乗りを上げたりとかしようよ。だつて——その方が楽しくない？」

紫苑は《水の王》の陣営の、三騎士に向かって語りかける。

しかし、水の牙、サファリム、《潮流の特権》を使う少女・渚、流体金属を首から下にまとった青年・淳司、その誰からも返事はなかった。皆、むつつりと押し黙っている。

「……あ、あれ、僕とは口も利きたくないってこと？」

ぐく、というよりも、紫苑の不気味さに臆しておるようだぞ。

「え、じゃあチャンスじゃん」

紫苑は騎士同士の戦闘の爪痕で、メチャクチャになっている前庭を見回す。

全身霜だらけになって倒れ伏す蒔エの他、重傷を負ってうずくまる看護師たちの姿もある。

「僕も蒔エさんたちのことが心配だし、提案するんだけどさあ」三人の《水の騎士》へ向け、紫苑はあつげらんと言ふ。「今夜はもう戦いなんてやめない？ 君たちが大人しく帰ってくるのなら、僕も何もしないし。これ、お互いにウインウインじゃない？」

よくわからないが、せっかかくビビってくれてるのなら、有効な交渉だと思った。

しかし、そう思っていたのは紫苑だけのようである——

「敦賀淳司。水原渚」

サファリムが重い口を、ようやく開いた。

紫苑は今さら犬がしゃべったところで驚きはしないが、何を言い出すのかと興味深々。

一方、配下の二騎士は、嫌な予感を覚えたような表情で応答する。

「何よ？」

「大将？」

「攻めたまえ。私が良いと言うまで、ずっとだ。決して勝手な判断で手を緩めるな。いいね？」二人の嫌な予感の中ししたようだ。

「チッ。どうせ拒否する権利なんて、あたしらにはないんでしょ？」
 「気楽に言ってくれるぜっ」

渚と淳司がぼやきながら、命じられるままに動き出す。

片や鞭を構え、片や頭部へも流体金属をまとい、紫苑へ向けてじりじりと距離を詰めてくる。紫苑は対照的に、緊張感皆無の態度。

（死なないってわかってたら、恐くないしねえ）

のほほんとそんな異常なことを考えながら、待つ。

最初に動いたのは、渚だった。

遠間から鞭を振るってくる。先端スピードが音速すら超えるのが、この武器の恐るべき特性だ。加えて、渚の《潮流の特権》によって操られ、まるで生物めいた複雑な軌道で迫る。

それを——紫苑はいとも容易く右手で、キャッチしてみせた。

「これ、痛いんだよね」

と、さつき頭を叩き潰された時のことを思い返し、ぼやきながら。

蒔エのように、回避のために《騎士特権》を使うまでもない。さらには、つかんだ鞭を逆に振り回して、反対側をにぎっている渚を片手一本で軽々と、病棟の外壁へ叩きつける。

蜘蛛の巣状に走った亀裂の中、渚は半ば壁に埋もれながら、目を丸くしていた。

紫苑の心力に比例した動体視力、及び臂力があまりに桁外れで、驚愕していた。

痛みよりも、動揺と精神的ショックの方に打ちひしがれていた。

「テメエ、こんクソガキがあッ！」

次いで淳司が間髪入れず、攻めかかってくる。

両手の先にまとわせた流体金属を、硬質な刃状に変えて、一閃、二閃。

それも紫苑はごくあっさりと、斬撃の軌道を見切り、淳司の両手首をつかまえることで防ぐ。ところが、淳司の攻撃はそれで終わらなかつた。

紫苑は知らない。

淳司がジークムントより授かったのは、《水の王権》の一側面、一属性——
 すなわち、《不定形の特権》だ。

淳司は己の肉体や、触れている最中の無機物が持つ本来の形状を、自在に変形させることができる（ただし質量保存の法則は無視できない）。その《騎士特権》を行使し、チタン合金の塊をどろどろの流体状に変形させ、自分の体にまとわせているわけだ。

ゆえにこの流体金属の鎧は、淳司の意思で、《特権》で、如何様にも形状が変わる。

淳司は両手首を、紫苑につかまれたままの格好で、《不定形の特権》を行使した。

それで彼の両肩から、流体金属でできた一对の、偽の腕が生えてくる。

先端が刃状となったその二本を、大きく振りかぶる。

「あ、かつこいい」

紫苑は四腕四刀となった淳司を見て、緊張感のない感想を呟いた。

その間にも、淳司の肩から生えた新たな二刀が振るわれる。紫苑は両腕の、肘から先を断られてしまう。淳司の両手首をつかんでいたその肘から先が、力を失ってポトリと床に落ちる。そのまま——まるで肉体の一部だったのが嘘だったかのように、砂塵さじんの塊と化す。

一方、紫苑の肘から先も、まるで斬り落とされたのが何かの間違いだったかのように、あつという間に再生を果たした。

《不死の特権》の異様さ、凄まじさを見せつけた。

「なんだよ……なんなんだよ、こいつ……っ」

絶句し、棒立ちになる淳司。

紫苑は容赦しない。エミルナの命を狙っているこいつらを許し、紫苑を平気で殺そうとしたこいつらに反撃しないような、無抵抗主義者ではないのだ。

「あはつ、誰かとケンカするなんていつ以来かなあ」

淳司に向かって拳を振り上げると、あつちもハッと我に返る。

紫苑のパンチは、いわゆるテレフォンパンチだった。耳の後ろまで右手を振りかぶって、「今から殴りますよ」と教えてやるような、ケンカ素人の攻撃。

にもかかわらず、淳司は回避できなかった。

そこから繰り出される打撃があまりに速すぎて、見切れなかったのだ。

また同様に、紫苑のパンチはいわゆる腰の入っていない、ただの手打ちになっていた。そんな素人フォームで殴られ、しかし淳司は弾丸のような勢いで飛んでいった。

壁に半ば埋まった渚の、すぐ隣に叩きつけられると、二人仲良く埋まる。

「露払いにもならん奴らめ！」

サファリムが業を煮やして吠えた。

くくく。彼奴め、二人をけしかけておいて、君の戦いぶりや《騎士特権》を、後ろで観察する魂胆だったのだからな。当てが外れて苛立っておるわ。まったく氷の牙サファリム、らしからぬこと！

「ああ、そういうこと」

「独り言とは余裕だな、少年！」

誰かの影に潜伏したエミルナの声は、その影の主には聞こえないらしい。ゆえに誤解したサファリムがまた吠える。

同時にその顎門から、猛々しい吹雪のブレスを吐く。

「ううわ……これはちよっと……」

ドン引きする紫苑。サファリムの《氷の特権》による、単純無比のブレス攻撃は、渚の鞭や

淳司のチタンブレードとは、攻撃範囲の広さでも威力の重圧でも次元が違った。

見る見る紫苑の体が、霜でびっしりと覆われていく。全身が凍てつき、体細胞が壊死していき。そのまま動けなくなっていく。

ただし――

にわかに動けないだけで、あとメチャクチャ冷たくて痛いだけで、のほほんとしていた。体細胞も壊死していく端から、『不死の特権』により蘇生した。

蒔エのように、復元速度が追いつかないなどということにはならなかった。

なぜなら紫苑は、エミルナから『不死の特権』の全てを授かった騎士公だからだ。

彼女が有していた、不死にまつわる力を「百」だとしたら、その「百」全部を継承できた、類稀なる心力の持ち主だからだ。

人の身でありながら、神の力を一端なりと、恣にできる、怪物だからだ！

大騎士たる渚と淳司を、まるで子ども扱いにちぎってみせたのも、伊達ではない。

暴れ踊る氷雪で視界を覆われ、吹雪く風切り音で耳を聳されてなお、紫苑は平気な顔をして、

「ねえ、エミルナ！」

叫ばずともいい。ここから君の声はよく聞こえる。

「『不死の特権』のおかげで死なないし、絶対負けないのはいいけどさあ。何か攻める手段はないの？ この膠着状態、僕が痛いだけで無意味だよ」

この『騎士特権』は、ただ死ななくなるだけの、無力な代物ではないはずだ。

エミルナが言っていたではないか。本来は攻撃的で、切り札的な『特権』なのだ。

ならば耳を澄ますがよい、紫苑。

「吹雪の音しか聞こえないよ！」

心力を高めよ。その上で聴くのだ。

「やってみる」

紫苑は己の体を内省し、脳髓に宿った不死の炎を感じとる。

その熱なき炎を、自分の両耳へたくさん集めるイメージをする。

たちまち――

――寒い……冷たい……寒くて……死ぬ……。

――助けて……誰か……。

――太陽は……どこ……温もりは……どこ……。

「なんか声が聞こえたっ。誰か巻き込まれてるっ？」

慌てるな。次は同じ要領で目を凝らしてみよ。

「オッケ。同じ要領だね」

紫苑は脳髓に宿る不死の炎を、今度は両目に凝らす。すると、見えた！

吹雪の中を不安げに揺れ踊り、彷徨う、謎の青白い炎の群れが。人魂めいた、鬼火どもが。

「何あれ!？」

「自分の死を受け入れることができなかつた、哀れな者どもの成れの果てよ。」

「人魂とかつて実在するんだ!？」

「ああ、する。するが、普通は死後すぐに、輪廻転生のサイクルへと還つていく。何百年もかけて記憶と人格を洗い落とされ、全く別人として生まれ変わるのだ。」

「死んだら何も救いがないってことはわかつたよ。不死をくれたエミルナに感謝だね。」

「くく、ともあれ、そういうわけだ。魂は実在するが、地上に留まることはあまりない。ここは病院だから、特別そういう手合いが多かつたがな。」

彼女の説明を聞いて紫苑は、もし自分が癌で死んでいたら、この人魂たちの仲間入りを果たしていたのではないかと想像して、ゾツとなつた。

「こういう死に損ないたちを、雲上界では総じて『亡者』と呼んでおる。もはやまともな人間性も残つてはおらぬ、自分で思考することも叶わぬ、憐れな存在だ。そして、『不死の特権』を持つ今の君には、操り人形にも等しい。存分に使役し、尖兵とするがいい。」

「それはどうやってやるの?」

「君のその躊躇のなさは、戦士として美德だな。声に力を込めて命じよ!」

「わかつた」

エミルナのアドバイスに従い、紫苑はまたさっきの要領で、不死の炎を喉に集める。

「この寒さの原因は、あの大きな犬の仕業だからさ。『サファリムを攻撃して』」

しかし、『不死の特権』は確かに効力を發揮した。ふわふわ、ふらふら、見る者を不安にさせる動作で、宙を漂うだけだった人魂の群れが、いきなり統制のとれた動きをみせる。吹雪の壁の向こうにいるだろうサファリムに、一斉に襲いかかつていく。

その攻勢は激甚だつた。

いきなり吹雪がやんで、視界が晴れる。代わりにサファリムの悲鳴が木霊する。

「ぐうううっ……ぬうっ、やめろっ! まとわりつくな……!」

銀色の毛皮を持つ犬犬に、何十という人魂が、腐肉にたかる蠅の如く群がっていた。

そして、人魂たちの触れた部分が、端から黒ずんで壊死していく。きれいな毛並みが台無しになっていく。

サファリムは苦悶し、のたうち、地面に体を擦り付けて人魂たちをこそぎ落とそうとするが、——温かい……温かい……。

——生き返る……。

——嗚呼……なんとよい心地だ……。

と、人魂たちはまとわりついたまま、決して離れようとしなない。肉体を喪った霊体である彼らを、土白、こそぎ落とすことなど不可能なのだ。

「なんか思ったよりやるね、彼ら」

。亡者どもはああやって生命力を奪いとることでしか、輪廻のサイクルに戻ることはできないからな。必死にもなるさ。もっとも普段は、それを考えつく自我が喪失し、地上を彷徨うことしかできなくなっているわけだが……君の命令のおかげで、彼らも気づくことができたのだよ」

「じゃあ僕、いいことしたんじゃない？」

。くくく、サファリムの感想も聞いてみたいところだがな……。

紫苑はまるで他人事みたいにサファリムの七転八倒を眺めながら、エミルナと会話に興じる。そのサファリムが吠えた。

「水原渚！ 敦賀淳司！ いつまでそこで寝ている！ 私を援護したまえ！」

どうやら動くか、しゃべるか、集中が途切れるかすると、吹雪の吐息を維持できないらしい。

「彼の正体が判明した！ この少年は《不死の騎士》だ！ 信じられんつ。エミルナ様は、《不死の特権》だけは誰にも渡さないというのが通説だったのにつ。なんと大胆不敵な御方だろうか!? 命が惜しくないのか!?」

悶えるのと、畏れるのと、感嘆するのとで忙しいサファリム。

。ともにいてくれる者もおらずして、不死に何の価値があるうか?。

エミルナはそう反論していた。

が、紫苑の影の中にいる彼女の声は、サファリムには聞こえない。

ゆえにこれが真実、誰に向けられた言葉かは、紫苑は誤解しなかった。

一方、サポートを命じられた渚と淳司は、困惑を隠せない様子で、

「ふ、《不死の騎士》って……」

「そんなんどうやって始末すりゃいんだよ、大将!」

「とにかく取り押さえろ！ 動けなくするなり、眠らせてしまふなり、方法は任せる！」

サファリムの指示を聞き、渚たちがおそおすと、鈍い戦意をこちらへ向けてくる。

「そろそろ面倒臭くなってきたなあ」

紫苑はほやきながら、己の両掌を見つめた。

「『FG』」

と、囁き声で命じた。

それまで他にもたくさんいた人魂たちが、紫苑の掌の上に集まってくる。

たくさん、たくさん、集まってくる。

紫苑はそれら全部を両手で包み込むと、掌中で粘土のように捏ねた。

もし本物の粘土細工なら掌を濡らしておくように、不死の炎で掌を覆うイメージで。
 むむ……。何をしておるのだ？

「うん、エミルナ。だんだん《特権》の使い方ってか、コツがわかってきたんだ」
 コツだと……？」

「まあまあ、見ててよ」

紫苑は無邪気に笑うと、掌中で捏ね上げたモノを後ろへ放った。

それは爆発的に体積を増大させると、一個の、巨大な魔物へと変貌した。

一言で例えれば、骨格標本のバストアップ像。

脊柱と左右肋骨の底の三点で地面に立ち、頭蓋骨は三階に届かんばかりの高さにある。

紫苑はその骸骨の巨人を背後に従え、渚と淳司を迎え撃つ。

「好きにやっつけていいよ」

紫苑の命に、骸骨の巨人は即応した。

巨大な右拳を、四階にも届かんばかりの高さに振りかぶり、淳司へ打ち下ろす。

ビル破砕用の重機めいたその打撃に、淳司はたった一発で轟沈した。流体金属の鎧のおかげで、命こそとりとめていたが、体が大の字にロータリーのアスファルトへめり込んでいた。

「あはっ、壁の次はロータリー？ よっほどこの病院が気に入ったんだね！」

紫苑はおかしくて噴き出してしまふ。

そして、命令はまだ取り消していなかった。

骸骨の巨人が、地面にめり込んだまま動けなくなった淳司を、さらに上から殴りつける。

何度も、何度も。執拗なまでに殴りつける。

そのたびに淳司の肉と骨が拉げ、アスファルトが砕けていく、重く異様な音が鳴り響く。

「やめなさいよ！ 殺す気!？」

渚が絶叫しながら、鞭を叩きつけてきた。

「え？ 今さらそれ言う？」

紫苑は打擲された右肩を砕かれ、一瞬で再生しながら、きよとんとなった。

「そっちから殺しに来ておいて、自分らがやられそうになつたら物言いつけるって、ちよつと勝手すぎじゃない？」

「うるさい！ あたしたちの事情も知らないくせにっ!!」

「そりゃ知らないよ。おしゃべりしよって言ったのに、無視したのもそっちでしょ？」

「うるさいうるさいうるさい！ あたしも敦賀も別に戦闘なんかしたくなかつたんだ!」

「あのだあ……」

こっちだつてしたくなかつたよ、という言葉はもう呑み込んだ。

渚は完全にヒステリー状態になっていて、正論なんて通じなそうだからだ。

「今すぐやめさせろ！ 敦賀を殴るな！ これ以上、殴るなつてばあ！」

メチャクチャに鞭を打ちつけてくるのを、紫苑は甘んじて受けてあげることで、渚の気がすんで、我に返ってくれることを期待する。

しかし、グチャグチャに叩き潰された端から、何事もなかったかのように再生する、不死の騎士公のあまりに異質な肉体は、渚をより恐慌状態に追い込むだけだった。

「なんなのよ、こいつ！ マジでなんなのよ、うわあああああつ……！」
 「なんか可哀想になつてきたなあ……」

紫苑はわざと受けるのをやめ、肉薄する鞭の先端をまた難なくキャッチ。

それから力いっぱい手練り寄せて、逆側をにぎる渚を、自分の方へと無理やりに引く張る。
 「きゃあああつ!」

悲鳴とともに飛んできた、同年代の少女の肢体を受けとめる。

渚は着痩せするタイプだった。抱き締めるとそれが伝わる。服の下に押し込められている、乳房のたつぷりとした量感や、柔らかさがしつかりと感じられる。

紫苑はそんな渚の双丘に顔をうずめ、より胸の感触を堪能した。

「ナニ考えてんのよこのエロガキツツ」

渚は目を吊り上げて怒鳴ったが、紫苑は聞かなかつたし、抗議も長くは続かなかつた。

紫苑は彼女の温もりや心臓の鼓動を感じながら——それらを直接——唇から思いきり吸い上げたからだ。生命力を奪いつつたからだ。

亡者にできるのだから、不死の騎士公にできないわけがないと、そう踏んで。

渚も自分が今、本当は何をされているのかを、直感したのだろう。

「ああああ……」彼女の声か絶望に染まった。「いやあ！ いやあああああつ！ あたし死にたくないっ。まだ死ねないっ!!」

ジタバタもがくが、紫苑は抱き締めて離さない。

「安心して、僕に身を委ねて？ 君のことも悪くはないからさ」

「いやあああああああつ、ナニ言つてんのこいつうううう?」

渚は暴れるのをやめようとはしなかつたが、結局、大騎士の彼女の臂力では、騎士公の紫苑には抗えなかつた。やがて生命力を吸い尽くされ、彼女は物言わぬ、冷たい肉の塊と化した。

紫苑はそつと丁寧に、少女の体を横たえる。

また淳司の様子とは窺えば、もう原型を留めないほどに、骸骨の巨人に叩き潰されている。見事なものよな、紫苑。私が教えることはもうない。……いや、違うな。《不死の特権》にそのような使い方があつたのかと、私の方が教わつている。

「あれ? もしかして呆れてる、エミルナ?」

然りだよ。君を見込んだ、私の目に狂いはなかつたと。いや、まさかこれほどまでとは……
 な。我がことながら呆れておる。

「は、それはますます光栄だね」

ようやく姉に一泡吹かすことができた弟のような、誇らしい気分浸る紫苑。
そのまま最後に残る、サファリムに向き直った。

「骸骨の巨人を背後に従え、正対した。」

「ハア……ハア……ハア……」

サファリムは全身で息をしている様子だった。

見事だった銀毛は、全てドス黒く変色していた。

それでも、あれだけ群がっていた人魂たちは、残らず消えていた。

サファリムから充分量の生命力を吸い上げ、輪廻のサイクルに還っていったのだ。

逆に言えば、サファリムは大量の生命力を奪いとられてなお、まだ存命だったわけである。

凄まじい戦士だった！

油断だけはしてくれるなよ、紫苑。あれは、氷の牙は、並の武人ではないのだ。《水の陣

営》でも屈指の猛者だ。

「まあ、精一杯やってみるよ」

紫苑は首肯し、さあ一対一だぞと意気込む。ところが――

「私はそれにつき合う気はないよ、少年。その強さ、その心力……貴公はただの騎士ではない。大騎士の器にも留まらない。貴公は不死の騎士公なのだろ？」

サファリムは忌々しそうに言い出した。

ご名答だが、紫苑は知らんぷりをする。

サファリムも構わず続ける。

「絶対不滅の《特権》を持つ、不死の騎士公。相手に尋常の戦いを挑むほど、バカバカしいことはない」

「だったら尻尾巻いて帰る？ 僕は約束は守る方だし、見逃してあげるよ？」

「そうしたいのは山々だがね……」

サファリムが大そのものの顔に、ひどく人間臭い表情を浮かべた。とてつもなく苦い、微笑を湛えていた。その顔で言う。

「不死の騎士公の存在は、天位争奪戦に数十年単位の禍根を残すだろう。少年よ――貴公は必ず、我が君にとって看過できぬ障害となる。だから私は、ジークムント様への忠義と泰公の一切を懸けて、貴公をここで仕留めなければならない」

「不死の僕をどうやって？」

紫苑は素朴な疑問で訊ねた。

サファリムは返事代わりに、いつでも跳びかかれるような、前傾姿勢となった。

そして、すっかりドス黒くなっていた彼の体毛が、再び銀色に染まっていく。

どころか、全身から真っ白な煙を噴き出し始める。

まるでドライアイスが気化していくような、濛々たる煙だ。

地上、雲上を問わず、人々はその状態を「死」と呼ぶ。

（あ……危なかった……）

魂だけの存在となった紫苑は、実在しない胸を気分だけでも撫で下ろす。

危うくサファリムに、永劫融けない氷の中へ、閉じ込められるところだった。だが肉体を喪って、以後はどうするのか？

紫苑は霊的な視線の先、奇怪な氷像と化した、己の肉体を見つめる。

鏡でもないのに、自分で自分の顔を見るのは妙な気分だった。

（まあ、これも幽体離脱現象の醍醐味かもしれないけどね）

そんな愚にもつかないことを考えている間にも、サファリムが自らを犠牲にして作った氷像に、変化が起きる。

氷中に閉じ込められていた紫苑の抜け殻が、一瞬でただの砂塵と化したのだ。

代わりに、魂だけとなって漂っていた紫苑は、一瞬で新たな肉体を得ていた。

何度、頭を潰されようと、腕を斬り落とされようと、すぐに蘇生していたのと同じ、これもまた《不死の特権》である。

そう――

肉体を喪って「死」を迎え、窮するのは、不死の騎士十六名ならざるサファリム一人だった。

紫苑の完全勝利だった。



「これで今宵、二度目になるが――見事だったぞ、紫苑」

エミルナの声と、拍手の音が聞こえた。

強力な《水の騎士》三人を、紫苑がたった一人で圧倒したことへの、惜しめない賛辞だ。

見れば、氷像の影の中からエミルナが、スーッと浮かび上がってくる。

地面に落ちていた、紫苑のバジヤマの切れ端（鞭で打たれた時に、ちぎれたのだらう）をひろい上げると、《時の特権》を使って元通りに復元する。それを投げ渡してくれる。

紫苑の肉体は不滅でも、衣服まではそうではなく、全裸の格好だったのだ。

はにかみながら、こそこそとバジヤマを着る紫苑。

「私もさつき、君に見られたのだ。紫苑も見せてくれるのが、公平というものではないか？」

「え、エミルナが見せてくれたのは上だけじゃん。不公平じゃん」

からかわれているだけだとわかっていても、真っ赤になってしまう紫苑。

こういうところがまだ「弟」臭いのだと、自覚できていない。

羞恥に頬を染めたまま、抗議を続ける。

「い、今はそれどころじゃないんだからさ。大事なのはここらなんだよ」
 「ほう、ここらとな？ 戦いは君の勝利で終わったように思えたが、まだ面白い物を見せてもらえると、期待しているのかな、我が騎士よ」

興味津々の様子になるエミルナ。

「多分、こたえられると思うよ」

紫苑は一つなずいてみせてから、振り返った。
 死後、魂だけとなった三人の《水の騎士》たちへ。

渾は横たわる自分の死体の前でへたり込んで、グスグスと泣いている。

淳司も同じく、原型を留めていない自分の死体の傍で、途方に暮れている。

サファリムだけが静かに、虚しく砂塵を閉じ込めただけの氷像を見つめ、

「……不甲斐ないことだ。……私は犬死してしまったのだな、少年よ」

無念げにそう言った。

恨みがましい感情は全く窺えない辺りが、本当に武人らしくて潔くて、紫苑は好感を覚えた。

それで親身にもなって、穏やかな口調で交渉を開始。

「犬死かどうかは、君たち次第だと思うけどね？」

「どういうことよ!? 悪いようにはしないって言ったのに、嘘つき！」

顔を上げた渚に、激しく非難される。

「だから、今から助けてあげるって」

紫苑は心外そうに肩を竦める。

「《不死の特権》で、君たちを蘇らせてあげる」

その言葉に、渚と淳司の顔色が変わった。

希望の明かりが、にわかには灯ったようになった。

一方、サファリムは冷静に、警戒の色を浮かべる。

またエミルナも、急に怖い顔になって、黙りこくってしまった。ただ彼女は賢いお姫様なので、よけいな口は挟まず、したいようにさせてくれる。ただ見守ってくれる。

紫苑も安心して交渉を続ける。

「僕は君たちを生き返らせることができる。それも一回や二回じゃないよ？ 蘇生は何度だって可能だ。《不死の騎士》は、他者にも不死を与えることができるんだ」

まだ実際に試したわけじゃないが、ちゃんと手応えがある。

エミルナもさつき驚いていたように、紫苑は《不死の特権》の扱い方を、早や自分の物としている。エミルナが百年捜し求めてやっと見つけたほどの、類稀なる紫苑の心力のあり様が、それを可能とさせている。

「本当に!？」

「俺たちを救ってくれんのか!？」

渚と淳司が食い気味に言ってきた。

「嘘じゃない。望むなら今すぐにだってするよ？　ただ、黙ってるのはフェアじゃないから、先に言っておくよ。僕が誰かに《不死の特権》を使うたび、怪我を再生させたり死亡状態から蘇らせるたび、その人はちよつとずつ亡者に近づいていくんだ。自我とか人間性が剝落していくんだ。まあ、ちよつとやそつとじゃ、さっきの人魂みたいにはならないと思うけどさ」

「だったらすぐに生き返らせて！」

「そうだ、このまま死んちまうなんて真つ平だ！」

「気持ちはわかるけど、最後まで聞いてつてば。《不死の騎士公》はね、亡者をまるで操り人形みたい、完璧かんぺきに使役できる。だから、君たちが一回でもこの《特権》で蘇ったら、ちよつぱり亡者になるってことだからさ……わかる？」

「……あなたに服従させられるってこと？」

「うん。僕が強く命令したら、それには逆らえないんじゃないかな」

「嘘だろオイ……」

「あと、あんまりたくさん蘇生を繰り返したら、そのうち僕が何も命令しなくても、勝手に服従する気持が芽生える……かも」

「冗談じゃないわよ！」

渚に思いきり怒鳴られ、涙目でにらまれ、紫苑も罪悪感がちよつぱりもたげる。

「でも、そういう《特権》なんだから、仕方ないじゃん。あと、君たちから襲ってきたんだから、ノリスクで生き返らせて欲しいって、それ虫がよくない？　加えて、僕もボランテイアする気はさすがにないよ？」

「あ、あたしらを生き返らせる代わりに、何か要求しようつての!？」

「キタネエ！　足元見やがって、ガキがつ！」

「ま、まさか、さつきみたいなイヤらしいことじゃないでしょうね!？」

「サカつてんじゃねえよ、エロガキ！　そこに転がつてるナスさんたちと乳練り合つてろ！」

渚と淳司が、口々に罵つてくる。

でも申し訳ないが、こればかりは紫苑も譲れない。

罵声を聞き流し、むしろ歓迎するような笑顔で、フレンドリーに手を広げて言った。

「君たちも《月の陣営》に入つて、僕と一緒にエミルナを守つてよ」

渚と淳司がポカンとなった。

一方、サファリムだけが冷淡に、

「そういう話だろうと思つていたよ。お断りだ」

「僕もサファリムさんならそう答えると思つてたよ。でも、一番味方になつて欲しいのは、あなたなんだけどなあ」

「主を裏切るくらいなら、私はこのまま死を選ぶ」

「そっか……。じゃあ、しょうがないね」
額に手を当てて嘆く紫苑。でも、半ば予想済みだったので、それほどショックというわけはない。割りきって渚と淳司に向き直ると、

「君たちはどうする？ 《水の王》への忠義に殉じる？ さつきはなんか、嫌々戦わされてるみたいな口ぶりだったけど」

「……………」

二人は即答を避け、考え込んだ。

どちらも思い詰めた顔で、しかし互いに見合わせようともしない、別々の方を向いている。

それがこの二人の関係性を表わしているように思えた。たまたま二人一緒の任務を与えられただけで、別に普段から仲が良いわけではないのかもしれない。

結局、先に答えたのは淳司だった。

「決めた。俺はおまえの軍門に降るぜ。やつぱ命あつての物種だからな」

敦賀!?——と渚が非難混じりの驚き顔になるが、淳司は全く悪びれず、

「俺は別に、ジークムントに忠誠誓ってるわけじゃねえ。たまたま惚れた女が《水の騎士》だったっつーか、騎士になれそうな奴を見極めて集める、美人局だったんだよ」

「くくく、まるでどこかで聞いたような話じゃな」

「エミルナは美人局じゃないからね!? 僕はミリもだまされてるなんて思っていないからね!?」

露悪的なジョークを言い出すエミルナに、紫苑がフォローするというあべこべ状況。

それに淳司が呆れつつも話を続け、

「一度入っちゃったら足抜けできねえ。ヤクザも《水の陣営》も変わりやしねえ。逆らったら殺すぞって脅されて、イヤイヤ戦ってただけなんだ。じゃあ、どこの陣営で戦ってもおんなじことだわな。生き返らせてくれるっつんなら、俺はそっちに寝返るよ」

「匹夫めが……………」

サファリムが不愉快そうに吐き捨てる。

淳司の言っていることが正論すぎて、反論や説得ができないのだから。

それにお互い肉体を喪ったとあっては、暴力にものを言わせて従わせることもできない。まずは一つ交渉成立、紫苑は上機嫌になって、

「じゃあ早速、素直な敦賀さんを蘇生させちゃおうか」

「淳司でいいぜ。ああーっと——」

「裏城紫苑。僕も紫苑でいいよ」

「早速よろしく頼むぜ、紫苑」

紫苑は一つうなずくと、淳司の死体の傍に行く。

エミルナがやけに深刻な眼差^{まなざし}しで、食い入るように様子を見守っていた。

その妙な視線が気になりつつも、紫苑は右手親指の腹を噛みちぎって、《不死の特権》を行

使。指先に、心力を凝縮した真つ黒い血の珠が、つーつと浮かぶ。

親指ごと死体へかざすと、雫となってその上へ落ちる。

すると、拉げて原型を留めていなかった淳司の肉体が、嘘のように、元通りに蘇生される。同時に彼の魂も、引き寄せられるように肉体の中へと戻っていく。

「生き返ったあ！」

淳司はプハッと息を吹き返し、上体を跳ね起こした。

自分の体のあちこちを撫でて回して、実感を確かめる。ワイルドだが、大人のような精悍さはまだない、どこか青臭さの抜けない彼の顔。その満面が、ますます無邪気な喜色で彩られる。

「ああああ恐かったああああ！」

快哉を叫んで、立ち上がる淳司。

衣服の類は再生しないので、鍛えられた逞しい裸身が嫌でも目に付く。股間でぶらぶら揺れている、意外と貧相なモノも。細かいことはこだわらない性格なのか、エミルナや渚といった女性陣の前でも、淳司は平気な顔をしていた。むしろ女性陣の方が視線を背けていた。

「おい、敦賀といったか？ その見苦しいものをしまえ！」

と、エミルナが辟易した口調で命じる。

先ほどまで蘇生現場を上げしげと見守り、実際に成功すると驚嘆のいで淳司の無事を観察していたのが、今はげんなり「見るのではなかった」とばかりの様子。

「へいへい、我らが女王様の仰せのままに」

淳司はおどけた口調で了解し、アスファルトの上に飛び散ったまま固まった、チタン鋼を集め始める。また首から下へ、流体金属の鎧としてまとう。

それが終わると紫苑に向かって、早やマブダチ気取りの馴れ馴れしい口調になって、

「なあ、一個実験したいことがあるんだけどよ？」

「実験？ 僕も興味ある」

「んじゃ失礼、っとー！」

淳司がいきなり、手先にまとったチタン鋼を刃状に変えて、紫苑の首を斬り飛ばした。

「あれれ？」

きよとんととなった表情のまま、紫苑の首が地面に落ちて転がり、やがて砂塵と化す。

その時にはもう、本体の頭部は再生している。

「やってくれたねっ？ 『絶対に人に言えない、恥ずかしい秘密を教えてください』」

紫苑は意趣返しに、声に心力を込めて淳司に命じた。

それで彼も即答。

「初めてナンパに成功して、脱童貞だって大喜びでホテルに連れ込んだら、実は女装したキレイな兄ちゃん、逆にケツを掘られた——って俺が暴まで持ってくつもりだった秘密を！」

ぺらぺら気持ちよくしゃべっていた淳司が、打ち明け終わった途端に、シャレにならないく

らい真つ青になる。

「てめえ、紫苑！」

「淳司も僕の首を刎ねたんだから、おあいこでしょよ？」

「てめえ、ピンピンしてんじゃねえかワリに合わねえ！」

「僕だって死ぬほど痛かったんだからね!？」

ギヤアギヤアと口ゲンカを始めるが、紫苑は別に本気で腹を立てているわけじゃない。

むしろ、こんな風に大声を出して、遠慮なく言い合うのが、憧れだった。

未来のない少年として周囲に、過剰に氣遣われ、弱りきった体を腫れ物のように扱われていた時には、決してできないことだった。

一類り文句をぶつけ合った後、淳司は今度は渚の霊体に向き直る。

「見たか？ 実験は成功だぜ！」

「そういえば、何の実験だったの？」

「紫苑の言うことに嘘はなかったってことだよ。確かに命令には逆らえないみてえだ。でも、俺から自発的に服従してえだとか、そういう気持ちは微塵も湧いてこねえ」

「どころか平気でぶっ殺してくれたよね。僕が不死じゃなかったら、どうなってたことやら」

「まさにそこを確かめたかったわけよ」

淳司はしてやったり顔で笑う。

それから、未だにそっぽを向いたままの渚へ訴えかける。

「渚も生き返らせてもらっとけよ！」

「……馴れ馴れしくファーストネームで呼ばないで」

「大切な姉ちゃんがいんだろ？ 残して死ぬわけにやいかんだろ？」

「プライベートも勝手にしゃべらないで！」

明らかに善意で勧めている淳司に、ツンケンした態度をとる渚。

なかなか強情というか、意地っ張りな性格なようだ。紫苑としても相手は女の子だし、助けあげたいのはやまやまだが、嫌がるものを無理に生き返らせることはできなかった。

これは説得に難航しそうだ、天を仰いだ時である。

「娘よ。君がサファリム卿のように、意志が固いのならばよし」エミルナが慈愛すら感じさせる声で、渚へ語りかける。「しかし、悩んでいるのであれば、あるいは単に夕夕をこねているだけなのであれば、君にはあまり時間が残されていないことを、告げておく」

「時間が……ない……？」

当惑する渚。紫苑と淳司も首をひねる。

だが、エミルナに指摘されて、三人とも「あつ」と気づいた。

霊体である魂の姿は、肉体と瓜二つではあるが、半透明というか、背景が透けて見える。そして、渚とサファリムの霊体が、さつきよりもっと透けて見えるというか、今なお徐々に

薄くなってきているのがわかったのだ。

「肉を喪った魂など脆いものでな。三十分もせぬうちに、形を留めておけなくなる。諦めて輪廻のサイクルに還るか、あくまで納得せずあの亡者どもの仲間入りをするか、二つに一つ、否が応もない。死ぬというのはそういうことだ」

説明しながらエミルナは、前庭を彷徨う人魂たち——讒言をぶつぶつと、苦しそうに呻きながら、自分で考えることも成仏もできない哀れな存在を、指し示した。

渚は愕然となって人魂たちを見ていたが……。

やがて、涙目になって（霊体にも涙はあったのだ！）怒鳴り散らした。

「わ、わかったわよ！ あたしも生き返らせて！ お願ひ！」

渚が素直になってくれたおかげで、紫苑も喜んで蘇生してあげられる。

横たわる少女の死体の唇へ、心力を凝縮した血の珠を落として、口に含ませた。

渚の死体は綺麗なものであったし、すぐに蘇生を遂げることができた。

衣服もそのままだったので、淳司の時のような騒ぎはない。

彼女もベタベタと自分の体をさわって、実感を確かめると、

「あ、ありがと……」

嫌で嫌で仕方ないけど、筋は筋だからお礼は言わなきゃと、ピイツとそっぽを向いて言った。なんか可愛い。紫苑はほっこりしてしまう。

それから渚は目を合わせないまま、

「……あたしも実験したい」

「というと？」

「試しにあんた、あたしに命令してみて」

「了か——」

「だけど、当たり障りない命令だからね!? 敦賀の時みたいにひどい命令なんかしたら、絶対に承知しないんだからね!」

「わ、わかったからっ。んじゃ……『スリーサイズ教えて』」

「知らないわよそんなのっ! 当たり障りない命令って言ったでしょっつ!!」

「あ、当たり障りないと思うんだけど……」

「殺すわよ!」

渚に怖い顔で詰め寄られ、紫苑は内心「やっところち向いてくれた」と喜ぶ。口にしたら、本当に殴られそうなのでしないけど。

「へー、知らねえもんなのな。フツー学校で測るんじゃねえの?」

「敦賀はマンガの読みすぎ。そんなの小学校が最後よ」

「でも、俺が通ってた高校じゃ測ってたぜ?」

「じゃあ学校によるんでしょっ。ねえこのセクハラ話、いつまで続けるワケ!」

渚は淳司にも囁みつきつつ、強引に話題を変え、

「なるほど、命令されるってこんな感じなのね。もしちゃんと知ってたら、確かに黙ってはいられそうになかった」

「というか、不可能な命令は実行しなくてすむんだね」

「あー、これこそマンガとかだったら、全力でメジャー探しに行ったりとか、極端な行動をとっちゃう展開になりそうだよな」

「そんなろくでもない《特権》じゃなくて助かったわ」

淳司と渚が胸を撫で下ろす。

「くく、期せずして紫苑にとつても、よい実験になったのではないか？」

と、エミルナも話の輪に入ってくる。

「そうだね。ただ、エミルナは今さら実験なんてしなくても、詳しいんじゃないの？」

「それがさうでもない」

「え、どういうこと？」

紫苑の《不死の特権》は、元々エミルナが有していたものであり、使い手だったのだから、初心者マークの紫苑より遥かに精通しているはずではないか。

（さっきの戦いの時だって、いろいろアドバイスして——って、あー！）

紫苑は思い返して、自分で気づく。戦闘が続くにつれて、紫苑が思いつきで《不死の特権》

の使い道をいろいろ工夫するたび、エミルナの様子がだんだんと変わっていたではないか。そんな使い方もあったのかと、驚いていたではないか。

「君も気づいたか、紫苑」

「う、うん」

「ならばよい機会だ、一つ教えておこう。なぜ私たち王族が、《特権》を独占しようと思わず、騎士に分け与えるのか——理由は様々あるがな。最たるは『騎士の方が往々にして、より巧みに扱える』からだ」

と、エミルナが説明してくれる。

全ての《特権》は王族が行使するにせよ、騎士が行使するにせよ、より心力の在り方が、その《特権》の本質と合致する方が——つまりは相性がいい方が——より強力に、より巧みに扱うことができる。

王族は様々な《特権》——つまりは《王権》の一側面、一属性——を有しているため、どうしても性に合うもの、合わないものが存在する。

エミルナならば《影の特権》の扱いに関しては、父たる天帝以外の何者にも負けるつもりはない一方で、《不死の特権》の相性はよくなかったという具合にだ。

また、騎士に授けられる《特権》やその上限は、その心力の在り方で決まってしまうという、

この法則。逆に言えば騎士とは百パーセント、己と相性のいい《特権》の使い手ということだ。「騎士の方が往々にして、より巧みに扱える」理由がここにある。例を出そう。

エミルナは《月の王権》の一側面、一属性として、幻影を操る《特権》を有している。そして、仮に換算して「百」あるその力のうち、「五十」を授けることのできる騎士が、現れたとする。エミルナとその彼は《幻影の特権》を半分ずつ分け合ったのだから、理論上は互角の使い手となるはずだ。

しかし現実には、彼の心力の在り方が、《幻影の特権》の本質により近いだろうため、より複雑に、より玄妙に行使できるのはむしろ彼の方で、互角にはならないという話だ。

「私はな、驚いているよ。そうは見えないかもしれないが、驚きすぎてどんな顔をしていいかわからない、あまりにうれしすぎてもうわけがわからない、そんな心境にいるのだ」

確かにエミルナの表情は硬かったが、しかし確かに声が震えていた。

そのことに紫苑は遅れて気づいた。「君ならば、不死の騎士公」になれる。この特権を授けるに相応しい。そう判断した、私の目が間違っていたようだ」

「ええっ!? さっきは『狂いがなかった』って言ってくれたのに!？」

「狂っていたとも。節穴だったとも——」

いつもクールなエミルナが、とうとう感に堪えられなくなったように、どこか陶然とした顔になって、ぶるりと武者震いをした。

「——なぜなら君は、私の想像を遥かに絶していたのだ! 私の常識を凌駕していたのだ! 雲上界の長い長い歴史には、私の前にも《月の女王》はいた。不死の騎士公もいた。しかし、紫苑。君は歴代の彼らを超越してしまっている!」

これ以上にステキなことはないとばかりに、高らかに謳い上げた。とんでもない大絶賛だ。

紫苑はついで先ほどまで無力な末期癌患者でしかなかったわけで、そもそも褒められ慣れていないわけで、もう恐縮頻りになってしまう。

「や、僕としては、エミルナの役に立ってるんだつたら、なんでもいいんだけどね」

自分はそんなにすごいことをしてしまったのだらうかと、くすぐったい。

「仕方ないことだが、君はわかっていない!」

その辺りの事情もエミルナは教えてくれる。

「不死の騎士公」が不滅の肉体を持っているのは、あくまで自身の範囲においてだ。他者まで自在に蘇生できるなどと、私は聞いたことがない」

「え、そういうもの!？」

「自我のない亡者として蘇らせ、意のままに操ることなら私もできた」
 臆病者の私は、ほとんど使ったことはないがな、と口中で小さく付け加えるエミルナ。
 「それは程度問題の話じゃない？」

紫苑は疑問を口にする。

さつき渚や淳司に語った通り、他者を何度も何度も蘇生していけば、どんどん自我なき亡者に近づいていく感触がある。

一方、エミルナが言う通りに、最初から自我なき亡者として蘇らせ、完全に支配下に置くことも、紫苑はできるという手応えがある。

つまり紫苑にとつて、両者の違いは程度問題であり、他者にいわば、軽度の《不死》を与えることで、同じく軽度の亡者化させているにすぎない。

「なるほどな……。それだけ紫苑が巧みに、玄妙に、《不死の特権》を扱えるということだ。やはり、君固有の《特権》だ」

エミルナも得心が行ったようにうなづく。

また、自我なき「亡者」と区別するために、渚や淳司のような存在を、意思持つ「不死者」と今後は呼ぶべしと、定義づけも同時に行う。

「僕からも提案があるんだけどさ、エミルナ」

「聞かせてもらおうか？」

「渚や淳司みたいにさ、他の陣営の騎士を、どんどん不死者にして、味方に引き入れて、君を守るための、僕の騎士団を作ろうと思うんだ」

「くくく、それはまた気宇壮大な話よな！」

紫苑の提案を気に入ってくれたようで、エミルナがまた感嘆した。

「というわけで、渚と淳司もよろしく。君たちが団員一号と二号だから」

「ハア？ 勝手なこと言わないでよ」

「どうせ逆らえないんだから、腹括れつてば。なあ団長？」

「そうそう。あと、なんか結成の儀式しないっ？」

「だからしないわよ！ なんで急に張りきってんのよ、あんた！」

「いやだって、そういうの憧れで……」

渚に否定され、紫苑はしょんぼりとうなだれる。

その彼の肩をエミルナが軽く叩いた。

「私を守り、私のために戦ってくれる騎士団だ。ならば私から名を与えねばなるまい。それを結成の儀と代えよう」

「くれるの!？」

にわかに喜ぶ紫苑に、エミルナはもちろんだとうなずいてみせる。
 やおら翼の如く両手を広げると、その名を唱え、授与してくれた。

「君たちは今日これから——黄昏の騎士団」と名乗るがいい」

紫苑はすぐに口で、「黄昏の騎士団」と何度も繰り返して、その響きを確かめる。興奮が後から後から湧いてくる。

「シンプルでカッコいいねっ」

思わず感激してしまったほどだ。

そして、意外なところからも同意を得られた。

「日輪を墜とし、月を迎える逢魔時の名を冠す……か。なるほど、君たちに相応しかろうよ」
それまでずっと不愉快そうに静観していた、サファリムだった。

その霊体は、いよいよ消えゆこうとしていた。

「不死の騎士公のに呪いあれ。黄昏の騎士団にに災いあれ。君たちが無残な末路を迎え、その上に我が君ジークムント陛下の新王朝が樹つことを、私はあの世から願っているぞ！」

今にも輪廻のサイクルへと還らんとしながら、なお呪詛を吐く。氷の牙。

それが《水の王》への最後の忠義、最後の奉公というわけか。

「言ってくれるぜ、大将」

せつかく盛り上がっていたところへ水を差されて、淳司が気分を害したように舌打ちする。

でも、紫苑の感想は異なる。

「僕はあなたのような気骨のある人、嫌いじゃないけどね」

サファリムの前に立つと、微笑みかけた。

逆に彼は、「馴れ合う気も、わかり合う気もない」とばかりに、顔を擧げてみせる。

紫苑の微笑に一抹の寂しさが混ざり、

「これも天位争奪戦の習いってやつだね」

決して触れられないサファリムの霊体に、顔に、両手で触れるようにした。

そのまま彼の姿は、魂は、消失した。

「へっ、やっとな成仏したか」

淳司の悪態に、紫苑はうなずいてみせる。

それから本物の笑顔になって、エミルナを振り返った。

「行こう——」

いざなうように手を伸ばす。

どこへ行くのかなどと、説明する必要はない。

言わずともエミルナならわかってくれる。

この二年間、毎夜、語り合った彼女ならば。

「ああ、行こう——」

エミルナはしっかりと紫苑の手をとった。

これは二人の宣言だ。

ずっと逃げ回るしかなかったエミルナと《月の陣営》が、ついに天位争奪戦の表舞台へと打って出て、前に進むというその意思表明。

立ちほだかるものは皆、敵だ。

全て踏み潰し、踏み越えていこう。

そう——

《黄昏の騎士団》は止まらない。

不死の軍団は止められない。

そのことを、満天下に知れ渡らせるのだ！

◆『黄昏の騎士団、蹂躞、蹂躞、蹂躞』の試読版はいくつかあります。

お読みいただいたままこのめぐりがついでにありました。

ここから先にはさらに快樂的で独善的な紫苑の蹂躞が待っています。

この続きはぜひ4月発売の本編でお楽しみください。